

とりはだ

作・演出 原田裕史

始まりの舞台は山間の谷間の古屋敷、はるか彼方まで伸びた畳の海の奥座敷。
色あせたふすまの水墨画が行灯の光にボウと浮かんでいる。

音楽が流れ、ゆっくりと、ゆっくりと明かりが落ちていく。
サス明かりの中に、一人の男（蓬萊）が現れる。

蓬萊

……時は秋、仲秋過ぎの十六夜の月、天頂高く煌々と、照らした先には虫の声、愛の調べが染み渡る、亥の刻半ばの午後十時、月の魔力に誘われた世にも希なる不可解騒動話であったそうでございます……否！時は冬、しんしんと降りつむ雪の冬の声、ボウと浮かぶや雪柳、合わせた衣文の隙間からスツと入るや氷の世界、背筋も凍る、まさに心胆寒からしめる椿事であったそうでございます……否！時は夏、異界が交わる彼わ誰時、魑魅魍魎どもが宴の支度……（間）いやいや、全ては曖昧模糊なる口承伝播、揺らいだ記憶の思い込み、確かなことなど、今となっては、だるれも覚えてはおりません、ならばこの私めが、ほんの少しの脚色を施しまして、この数奇なる女の物語、とくと語って進ぜましょう……頃は明治の半ば過ぎ、今を去ることおよそ百数十年前、近代化とは名ばかりのまだまだ風変わりな風習が残っていた頃のことでございます。

ピカッ！

閃光が一つ、ほんの一瞬だけ舞台を照らし出す。

刹那、浮かび上がった舞台の上には、武装した女たち。

ゴロゴロドッカーン！

雷鳴が轟き、女たちの姿はかき消すように闇に溶けていく。

闇の中に激しい雨の音が聞こえてくる。

ゆっくりと、ほのかに明るくなる舞台、全貌が明らかになっていく。

舞台には、吊り下げられた幾つかの布。

布には薄墨の書とも絵とも判別できない模様が描かれている。

それはどこか古い屋敷の煤けた襖絵を想起させる。

舞台上には、襷掛けをし、ほっかむりをした女たち。

その手には、木刀や竹刀、あるいはよく分からない武器が握られている。

その中であって、ただ一人、吉良だけがほんの少し心細げである。

女たちの視線の先に（下手）、吉良の前夫、松岡鶴八が不機嫌そうに、どっか腰を下ろしている。

鶴八の横では後妻のお美代が呆けた顔で、女たちを見回している。

ややあって、

再び語り始める蓬萊。

蓬萊

……時は師走の十二月、時節はずれの雷鳴が轟き、驚き、山椒の木、ピリリと辛いは修羅場の男女（なんによ）、窓の外では暴風雨、窓の中にも暴夫婦、荒れる天気と燃え立つ愠気、雷神、お空で太鼓を鳴らし、女人（にょにん）は嫉妬でキッと鳴く、あゝ、これぞ天と女のハーモニー、嵐の夜のうわなり討ち、これより、あ、すたゝとでございます！

イントロが流れる。

ほの暗かった舞台が明るくなる。

うわなり討ちの女たちが歌い始める。

【UWANARI・UTAI】

やっつけるぞ やっつけるぜ 前の夫の後妻

恨み つらみ 妬み 嫉み

呪って倒すは まだるっこい

殴って 蹴って (ボコボコに)
つねって かじって (コテンパン)
あゝ うわなり討ち
捨てられた妻よ 武器をとれゝ

やっつけるぞ やっつけるぜ 前の夫の後妻
憎悪 悋気 燃える 嫉妬心
泣き寝入り するのは 趣味じゃない
ちぎって もんで (ポポイのポイ)
折って 畳んで (ざまあみろ)
※あゝ うわなり討ち
捨てられた妻の敵討ちゝ

※ (繰り返し)

唄の間に女たちは、鶴八とお美代を挑発する。
仲裁人となった蓬菜が、女たちを止める。

唄が終わり、

君江 さあみんな！やっちゃうよ！

女達 おう！

鶴八 ちっ。

君江 遠慮することはねえ、そこでふんぞり返ってる若夫婦様の顔を青じろく変えてやろうよ。

女達 おう！

貞子 私たちは犬っころじゃないんだ、ポイと捨てられて、はいそうですかと納得できるもんですか！

大きく頷く女達。

貞子 私たちは、犬っころではないぞゝ！

女達 そうだゝ！

勝子 ましてや古畳でもなくい！

女達 でもなくい！

なずな まだまだ使えるぞゝ！

女達 使えるぞゝ！

お桃 女とおまんまを粗末にするなゝ！

女達 粗末にするなゝ！

鶴八 うるせえ！人んちで気炎上げるんじゃないや、おう仲裁人さんよ、早いところやってくれよ、俺は忙しいんだ。

君江 そうだよ、こっちはお吉良ちゃんの仇、討ちたくてうずうずしてんだ、早いところ始めておくれ。

吉良 (不安そうに君絵の袖を引き) 君ちゃん。

なずな (おどけて) 暴れたくて、待ちきれないよ。

女達 ハハハハハ。

豪快に笑う女達に舌打ちする鶴八。

鶴八 (苦々しく) ったく、うるせえな。

蓬菜 ああ、分かった。

仲裁人になった蓬菜が中央に歩み出て、懐から書状を取り出す。

蓬菜 ……書状、松岡鶴八がうわなりお美代殿。

お美代 (小声で) うわなり？

鶴八 後妻、おめえの事だよ。

蓬菜 ……そちらには覚えがござろう、おしどりが如くに中睦まじく暮らせし、我ら夫婦鶴八と吉良との間に、青臭い若さを武器に闖入し、卑しい色香を持ってわが夫、鶴八を誘惑し、かどわかし、惑わせ、果ては私を追い出し、正妻の玉座に座りし、その行為甚だ度し難し、女の風上にも置けぬこと許しがたし、よって、ここに私は、うわなり討ちの慣習を以って、鉄槌を下すことを宣す、松岡鶴八が元正妻、お吉良。

吉良 (小声で) 私、あんなの書いてないよ。

君江 私が書いたのよ、名文でしょ、格調があつて。

蓬菜 ……尚、当方の持参は、慣習に則り、木刀や竹刀のみとするが、但し、木の刃であっても嫉妬の念こもりたれば、骨の三つ、四つ、五つ、六つは砕けるかも知れぬ事を覚えておられたし。

お美代 旦那様。

鶴八 なんだ？

お美代 こ・わ・い。

蓬菜 (女たちに) 言っておくが、うわなり討ちはあくまで儀式だからな、本当に危害を加えてはならんぞ。

貞子 そんな事は分かってるよ、ただ、こちらら頭に血が上って、ちくと物が見えにくくなってからね、(お美代に) 寵と間違えてぶん殴る事があるかも知れないけど、そんな時はごめんよ。

お美代 旦那様。

鶴八 なんだ？

お美代 さらに、こ・わ・い。

鶴八 心配するな、俺がついてるよ。

お美代 旦那様がついていても怖いものは、こ・わ・い。

鶴八 分かったよ、少し釘刺しとくから待ってな。

鶴八は立ち上がり、女達の中に。

鶴八 おい、てめえら！……（女たちをねめまわし）こっちはそのお吉良の気持ち汲んで大人しくしてんだ、うわなり討ちだかなんだか知らねえけどな、こいつに手出したらただじゃおかねえからな、隣の部屋には名刀、肥前丸があるって事をよく肝に命じとけ！

貞子 何凄んでんだよ、この尻軽亭主。

鶴八 な、何……。

貞子 名刀だか金平糖だか知らないけどね、刃物が怖くて秋刀魚がおろせるかってんだ！

女達 そうだ！おろせるかってんだ。

鶴八 く……。

貞子 それにね、うわなり討ちは女の仇討ちなんだ、助太刀ご無用、男はご法度なんだよ。

勝子 タマタマの付いてるモンはその押入れにでも引っ込んでな。

女達 タマタマは引っ込めろ！

鶴八 くっ……おい吉良！

吉良 は、はい。

鶴八 でめえ随分な真似しやがるじゃねえか！別れ際に俺がお前になにしてやったかもう忘れたか！

吉良 お、覚えています。

鶴八 だったらこいつらに言ってやれよ、俺はお前の薄っぺらな持参金の上に、こゝんな分厚い手切れ金乗つけて渡してやったんだ、感謝されることはあっても、うわなり討ちなんぞされる筋合いはねえんだ、それともあれじゃ不服だったか、欲の皮が突っ張りやがったか。

吉良 不服などはありません、ただ私の気持ちも考えずにお金で形をつけようとするあなたのやり方は……。

鶴八 俺のやり方は何だ！言ってみろ。

吉良 ……。

君江 品がないんだよ、あんたのやり方は。

葵 そうそう、無粋なんだよ。

鶴八 何だと！

葵 これだから成金はやだよ、女切るときはもっと粋にやらなきゃ。

なずな 札束で、捨てられた女房の心が鎮められるかってんだ。

君江 いくら金積まれたってねえ、悔しいモンは悔しいんだよ、（皆に）はい。

女達 （若者風に、鶴八とお美代に向かって凄みながら）悔しいんだよ！

お美代 こ・わ・いゝ。

鶴八 ……。

鶴八はたじろぎ、後ずさりする。

君江 さあ、お吉良ちゃん、黙ってないであんたも何か言ってやりなよ、あれがあんたの亭主を略奪した女だよ、あんたの幸せを奪った泥棒猫なんだよ。

君江に促され、遠慮がちに吉良はお美代の方を見る。
怯えているのか、呆けているのか分からない表情でお美代が見つめ返す。

吉良 ……。

吉良の心に、怒りが湧いてくる。

吉良の顔がほんの少し険しさを帯びてくる。

吉良 ……あなたが。

お美代 ……旦那様、前の奥様が睨んでる……どうしましょう。

鶴八 知らねえよ……とりあえず、侘びでもいれとけよ。

お美代 は、はい……この度は……。

吉良 ……この度は……。

見つめ合う先妻と後妻。

遠慮がちにはあるが二人の女の意地がぶつかり合う。

ほんの少しの間。

お美代 ……この度は……。

さらに睨みあう二人。

視線は吉良の方がやや優勢。

しかし、お美代にも意地がある。

お美代 ……勝てば官軍。

吉良 ！

鶴八 お、おい！なに火に油注ぐようなこと言ってんだよ！

吉良 すいません、なんか負けたくなくて、つい。

勝子 さく！何て女だよ！

葵 もう許さない！

女たちが掴みかからんばかりの勢いで、お美代に近づこうとする。
君江がそれを制する。

君江 ……さあ仲裁人さん、もういいだろう、早いところ私らの怒りを解き放っておくれよ、心に傷を負った手負いの熊の如き怒りをね！

蓬萊 あ、ああ、しかしお前らあまり派手にやり過ぎんようにな、それから、絶対に人に危害を加えてはならんぞ、いな。

なずな 分かってるよ……今んところはね。

お桃 そうそう、今んところはね。

女達 フフフフ。

お美代 旦那様、何か迫力増してる。

鶴八 おめえの所為だよ！

貞子 女の恨みは三倍返し、思う存分暴れさせてもらうよ。

勝子 突撃！

女達 どりゃ！

女達は氣勢をあげ、それぞれの方向に。（一端退場です。）
一人吉良だけが残っている。
ほんの少しの間の後、聞こえてくる破壊音。（SEと生音で。）

お美代 なんか壊してる。

鶴八 あゝもう勝手にしやがれ！

鶴八はやけになり、大の字に。
と、破壊音に交じって勝子の声。

勝子の声 あゝ！なんか高そうな壺発見！

鶴八 あ、馬鹿、それは九谷の……。

ガシャーン！（壺の割れる音）

鶴八 ……ああああ。

勝子の声 気持ちいい！

なずなの声 最高！うわなり討ち最高！

お桃の声 この辺もいっちゃうよ。

ガシャーン！（何かの割れる音）

お美代 旦那さま。

お美代が不安そうに鶴八の袖を引く。

鶴八 煩い、オメエもボクツとしてねえで、何か被つとけ、木刀が飛んでくるかも知れねえぞ。

お美代 ふえっ！

お美代はオロオロし、そして舞台奥へ退場。
ドカン、ガシャン！
喧騒は続いている。

鶴八 (様子を見に行き) ちきしょう、派手にやってやがる、おい仲裁人さん、もうそろそろいいんじゃないか、家の中
目茶目茶になっちゃうぞ。

蓬菜 まだ三分もたっておらん、あまり早く止めに入るとわしが叱られる。

鶴八 ちっ、くだらねえ茶番持ち出しやがって、誰がうわなり討ちなんて始めやがったんだ。

蓬菜 誰が始めたかは知らんが、室町時代にはもう習俗としてそれなりに定着していたみたいだぞ、そうそう源氏物語の
六条御息所の生霊、葵の上をとり殺すやつ、あれもまあ一種のうわなり討ちだな、うん。

鶴八 知らねえよ、そんなのは。

蓬菜 まあ情の薄い男の報いだと思って諦めるんだな。

鶴八 (吉良に) ったく、あんなに金渡したのに、恩を仇で返しやがって！

吉良 ……。

鶴八 なんとか言えよ！

吉良 ……。

舞台奥からお美代の声。

お美代 旦那さま。

鶴八 何だ！

お美代が鍋を被り、座布団を体に巻きつけ、ハタキを持って現れる。

お美代 これで敵の攻撃を防げるでしょうか？

鶴八 …… (呆れて) 十分だよ。

貞子の声 うりゃー！

袖から一際大きな貞子の声と破壊音。
身構えるお美代。

お美代 ふっ、ほっ、はっ。

怪訝そうにお美代を見る鶴八。

お美代 少し気合を入れております。

鶴八 ……。

ほんの少しの間。

吉良 ……私は。

鶴八 あん？

吉良 私は離縁された身の上なので、今更嫉妬などしても仕方のないこと、そう自分に言い聞かせてまいりました……けれど私は、よりによって……あの鍋女に負けたのですね。

鶴八 鍋女？

吉良 ……（じっと唇を噛み）悔しい……。

お美代 ふっ、ほっ、はっ。

吉良 ……よりによって鍋に……鍋如きに。

お美代 ふっ、ほっ、はっ。

調子が出てきたのか鍋女は軽くステップなど踏んでいる。

吉良 この鍋女……！

吉良が切れた。

吉良はお美代に掴みかかり、
バチーン！（SEです）
思わずうずくまるお美代。

鶴八 お美代！

鶴八が駆け寄り、お美代を起こす。
お美代の鼻から流れる二筋の鼻血。

お美代 ふぁんなふぁま、い・た・い。 （旦那さま、痛い）

鶴八 何しやがるんだ、人に手を出すのはご法度だろうが！

吉良 ……鍋女に……鼻血の鍋女に……。

鶴八 この野郎！

鶴八が吉良に掴みかかり、吉良を突く。

蓬萊 おい！

吉良はよろけて上手の袖に。
ガン！ と鈍い音がする。

蓬萊 止めんか！男は手出し禁止だぞ。

蓬菜が鶴八を羽交い絞めにする。

鶴八 先に手を出したのはあいつのほうだぞ！

袖から聞こえる吉良の声。

吉良の声 ……なべられた（なめられた）……鼻血の鍋になべられた。

鶴八 ！

袖の向こうで顔を上げた吉良の顔に思わずたじろぐ鶴八と蓬菜。
君江が奥から現れる。

君江 お吉良ちゃん、あんたもやりなよ、スカッとす……。

君江もギョツとする。

君江 ……お吉良ちゃん、その額……だ、誰にやられたんだい？

吉良 鍋女の夫に……。

吉良が袖から出て、姿を現す。

吉良の額からは血が流れ、その顔は凄く怖くなっている。（袖で隈取りをしたのだ。）

吉良 ……許すまじ……許すまじ、鍋女……ぬおおおお！

吉良は突然上手から下手の袖へと走る。

一瞬の間。

再び現れる吉良、その手には日本刀。

鶴八 そ、それは肥前丸。

吉良 （お美代を睨みつけ）その頭。

お美代 ひえっ！

吉良 叩き切ってやる！

お美代 ひえ〜！

吉良 待てえ〜！

逃げるお美代。

追う吉良。

鶴八 馬鹿！止めろ！

君江 お吉良ちゃん！

吉良 ぬお〜！

騒ぎを聞きつけ、戻ってくる女達。

日本刀を振り回す吉良は暴れる、暴れる。
囃す者、止める者、更に暴れる者、氣勢を上げる者等々、人々は大いに入り乱れ、舞台は混乱する。
少しコミカルな音楽が高鳴っている。
やがて明かりが落ちていく。
再びサス明かりだけの舞台。

蓬萊

……女人狂うて般若となる、その暴れっぷりたるや、まるで小型台風のようでした、なにしろ名刀肥前丸の刃がボロボロになり、柱のあちこちにおくきな傷が無数に……いやはや、けが人の出ないのが不思議な程でした……しかし、本当に不思議な話はこのから先、お吉良の身の上に起きた事でございます……。

蓬萊は下手に退場。

音楽が流れ、舞台奥の吊り下げられた布に吉良のシルエットが浮かび上がる。
シルエットの向こうで吉良は泣いている。

吉良は鏡を取り、わが身を写す。

鏡に写ったわが身に吉良は怯え、おののき、そして又泣く。

苦悶する吉良のシルエットはゆっくりと消えていく。
舞台に明かりが入る。

ほんの少しの間。

舞台奥に君江が登場。

君江

……お吉良ちゃん、具合はどうだい？

吉良

……。

布の向こうの吉良は何も答ええない。
ほんの少しの間。

君江

上がらせてもらうよ。

吉良

……。

君江は遠慮がちに中へ入り、布の前へ。

君江

おっかさんに、あんたがずっとふさぎこんだままだって聞いたから……額の傷、痛むのかい？

吉良

……（か細い声で）痛みはもう……。

君江

そう、じゃあよかった、あ、みんなも心配してさ、そこまで来てるんだよ、呼んでもいいだろう？

吉良

呼ばないで！

君江

……。

布の向こうで吉良が微かに震えている。（見えないけどね。）

君江

どうかしたのかい？

吉良

どうもしないよ、なんでもないよ……本当に。

君江

……（一瞬思索し）あ、そうか！お吉良ちゃん、あれだろ、あんなに大暴れしたからバツが悪いんだろ？

吉良

……。

君江 まあ無理ないよね、蠅一匹殺したことはないあんたが日本刀振り回しての大立ち回りだもんね、そりゃあバツも悪くなるわね。

吉良 ……。

君江 でも本当に驚いたよ、子どものときからずっと付き合ってるけど、あんなお吉良ちゃん見たの初めてだよ、この鍋女〜！だもんね。

吉良 ……。

君江 でもさ、そんなにふさぎこむことないよ……私、昔から思ってたんだよ、お吉良ちゃんは何でも我慢しすぎるって、今度の事にしたってそうさ、あのろくでなし男、結婚して一年であんた突っ返して、それからわずか三ヶ月で後妻もらってんのに、あんたじっと耐えてんだもんね、まあやり方はちょっと荒っぽかったと思ってるけど、私はあんた焚きつけて、うわなり討ちやったの正解だと思ってるよ……大丈夫、二三日もすれば気持ちもすっきりするよ。

吉良 ……そうじゃないんだよ。

君江 え？

吉良 ……あのね……君ちゃんだから言うけどね……。

君江 なんだい？

吉良 私ね……私……どうも変なんだよ。

君江 変って何が？

吉良 ……その……私……。

君江 ？

女達が舞台奥に顔を出す。

葵 お吉良ちゃん、具合どうだい？

お桃 傷、又痛むのかい？

君江 痛みはないみたい、でもなんか様子の変なの、元気がないって言うか……。

貞子 日ごろ大人しいのが大暴れしたから放心してるんじゃない。

葵 そうそう祭りのあとの空しさってやつよ。

勝子 大丈夫、すぐ元に戻るよ。

等と言いながら女達はズカズカと部屋に入り込み、吉良の布を囲む。

なずな じゃあ私が元気の出る話してやるよ。

お桃 何？元気の出る話って？

なずな 昨日、町でばったり会ったんだよ、あのお美代って後妻に、でね、あいつ、ヒェ〜！って叫んで近くの金物屋に飛

び込んでんの。

勝子 ハハハ、また鍋でも被ろうってつもりかい？

なずな 多分ね、ハハハハ。

葵 お歳暮で丈夫なのを一つ送ってやろうか、ハハハハ

「そりゃいいや。」「首からぶら下げられるよう紐付けといてやろうか？」等と言いながら女達は笑う。その笑い声に交じって、吉良の微かなすすり泣き。

君江 お吉良ちゃん……あんた、泣いてんのかい？

女達の笑いが止まる。

吉良の微かなすすり泣きが聞こえてくる。

君江 一体どうしたんだよ？

吉良 なんでもないよ……。

君江 なんでもなくないだろ、何で泣いてんのさ。

吉良 泣いてないよ、本当になんでもないから、すまないけど今日はもう……帰ってくれないかい。

一瞬の間。

君江 お吉良ちゃん、開けるよ。

君江が襖を開けようとする、（と言っても襖はないので、無対象です。）ほとんど同時に吉良の手が布の向こうから出て、それを阻む。（客席からは吉良の手しか見えない。）

君江 ちょっと、何押さえてんだよ、開けておくれよ。

吉良 駄目！お願いだから開けないどくれ！

君江 何隠してんだよ、いいからちょっと開けてくれよ！

吉良 開けるわけにはいかないんだよ！お願いだからこのまま帰っておくれよ。

君江 帰れる訳ないじゃないか、いいから開けなよ。

吉良 駄目なんだよ、どうしても駄目なんだよ！

君江と吉良はしばし「開けろ」「開けない」のやりとりを繰り返し、

君江 お吉良ちゃん！

カーテン！

ついに襖が開けられる。

勢いあまった吉良が転ぶようにして姿を現す。

現れ出でた吉良の額には……一本の角が生えている。

慌てて顔を背ける吉良。

君江は息を呑む。

女達は硬直する。
ほんの少しの間。

吉良 ……あ、君ちゃん、すごい力で引っ張るから、転んじまったよ……ハハ……。

さらにほんの少しの間。

君江 ……あ、あんた。

吉良 (角を隠しながら) なんだい？

君江 ……(おそろおそろ) あんた……おでこに何くっつけてるんだよ。

吉良 ……ち、違うの、これは違うの……あ……最初はただの瘡蓋だと思ったの、でもその瘡蓋が……あの後妻の事とか考えてると、憎たらしいか思っていると……瘡蓋が……ムクムクって盛り上がってきて……膏薬とか塗ったんだけど……まるで効かなくて……そのうちどんどん大きくなって……なんだか……なんだかこれ、だんだん……だんだん……角に……。

勝子 きゃ~~~~!

勝子の悲鳴に弾かれ、人々は逃げ回る。

吉良 待ってくれよ、逃げないでくれよ!

貞子 鬼だ〜! 鬼が出た〜!

吉良 違う、私は鬼じゃない……私よ、ねえ誰かこの角取って……君ちゃん、君ちゃん助けて……。

鬼女となった吉良が怯えながら、人々にすがるようにして追う。

恐怖のあまり、足をすべらす者、ぶつかる者、逃げ惑う人々、腰を抜かすもの

鬼ごっこの原風景がここにある。

音楽が高鳴り、やがて明かりが落ちていく。

暗転。

闇の中に鉄兄(てつにい)の台詞が響く。

鉄兄 おい、早くしろよ!

舞台に明かりが入る。

舞台下手には鉄兄。

中央の布の向こうには、しゃがみ込み横顔を出した勘平。

勘平はどうも野糞をしているようだ。

勘平 待ってくださいよ、今大事なところなんですから。

鉄兄 ちっ。

勘平 僕は、極度の便秘症だから数少ない便意をものにしないと……だからちょっと話しかけないでくださいよ。

鉄兄 (うんざりと) 分かったよ。

勘平 ……うん……あ……ほっ……うううう。

勘平はいきむ。

鉄兄は苦虫を噛み潰した顔で待っている。
鳥の鳴き声が聞こえたりする。

勘平 ……あゝ……駄目だ。

勘平は諦め、ズボンをあげ始める。

鉄兄 もう済んだのか？

勘平 いえ、駄目でした、苦手なんですよね、排便が、得意な奴が羨ましいや。

鉄兄 (吐き捨てるように) いねえよ、得意な奴なんて。

勘平 それで、そのお吉良って女はどうなっちゃったんですか？

鉄兄 ……それっきりだそうだ、それっきりお吉良の姿は村から消えうせた。

勘平 一体何処に行ったんですかね？

鉄兄 さあな、なにしろその出来事から二十年近く経ってるらしいからな、死んだって者もいれば、どこかで人の肉でも喰らって生き続けているという者もいる、まあ噂だな。

勘平 ふくん、こんな山深い田舎ならではの話ですね、(客席後方を指差し)あの辺の山にいるかも知れないな……ふん、居るわけねえな、どうせ尾鰭歯鰭のついた話だろうし。

鉄兄 そう、俺もそう思っていたよ。

勘平 え？

鉄兄 二昔前の、ちょっと頭のおかしくなった女の話に、噂の尾っぽが付き、鬼女の話が出来上がった、精々がそんな所だろうってな。

勘平 違うんですか？

鉄兄 さつき、面白い話を耳にしてな……一人の若者が神隠しにあって、数ヶ月ぶりに里に帰ってきたそうなんだ。

勘平 神隠し？

鉄兄 ああ……隠したのは、鬼だって言う話だ。

勘平 ほ、本当ですか？

鉄兄 それを今から確かめに行くんだ。

勘平 あれ？鰐(ワニ)男迎えに行くんじゃないんですか？

鉄兄 鰐男は逃げねえよ。

勘平 ……。

鉄兄 面白い話してやろうか？安永年間に両国の見世物小屋に鬼娘ってのが登場してな、大層な人気を博した事があったんだ。

勘平 へえ〜。

鉄兄 それまで、その小屋の最大の売りは熊女だったらしいんだがな、あつと言う間に鬼娘がそれにとって代わり、鬼娘は金になるってんで、あちこちの小屋に偽者が出現したらしいんだ……なんで鬼娘がこんなに人気になったか分かるか？

勘平 さあ？

鉄兄 人間の心の奥にはな、鬼が棲んでんだよ、いつかそいつが現れ、自分にとって代わるんじゃないか？そんな恐怖感がどんな人間にもあるんだ、だから見たがるんだ……鬼になった女をな。

勘平 成る程ねえ……鬼になったお吉良か？ちょっと面白そうですね。

鉄兄 鬼は金になるんだよ。

勘平 かも知れませんか……じゃあ鱈男は後回しということだ。

鉄兄 おう……あ、それとな、今はもうお吉良とは呼ばずにキラと呼ぶそうだ。

勘平 キラ

鉄兄 キラのキは鬼のキ、ラは羅刹のラだ。

勘平 お吉良はキラに……。

鉄兄 ……意外と尾鰭のオが取れたのかも知れねえぜ。

勘平 かも知れませんか。

二人は悪そうな笑みを浮かべながら退場していく。

誰も居なくなった舞台。

上手の何かを模した布がズルズルと引き下げられていく。

まるで、そこから生まれ出てくるように、ぬ(妖怪)が這い出てくる。

ぬは一度大きく伸びをし、舞台下手へ。

去っていく鉄兄と勘平の様子を伺い、

ぬ 又又又又又又又。

ぬは、しばし奇妙な動きをし、やがて客席通路を通過して退場していく。
※もしも客席が大混雑で通れないようなら舞台上手へ。

ぬが退場していく間に、貞子、葵、君江、蓬菜、耕作が登場。

布の前に耕作、その横に蓬菜、その二人を半円に囲むように人々は座す。
重い空気が漂っている。

しばしの間。

舞台下手から猟銃を抱えた信三が登場。

信三 遅くなりました。

蓬菜 ああ信三さん、遠いところからどうも有難うございます、さきこちらへ。

信三 失礼します。

信三は下手側に猟銃を抱えるようにして座す。

蓬菜 さあ、わざわざ信三さんも来てくれたんだ、黙ってないで本当の事を話せ。

耕作 本当の事もなにも、さっき話したとおりですよ……ワラビ捕りに行って、道に迷って、帰る道が分からなくて、ずっと山の中をさまよってたって。

蓬菜 お前が、三ヶ月も帰り道が分からんわけないだろう！

葵 そうだよ、耕作ちゃん、あんたはこんな小さいときから、お父っあんにくっついて山歩きしてたんだ、帰り道が分からないわけないだろう。

貞子 この辺りの山のことは、あんたなら全部知ってるじゃないか。

耕作 僕にだって、知らない場所がありますよ、道に迷ってたからってそんなに不思議がることないじゃないですか。

蓬菜 嘘をつくな！三ヶ月も山の中歩き回ってた奴の服がどうしてそんなに汚れてないんだ、お前の服は、行方不明になった時とほとんど同じだったじゃないか、途中で木に引っ掛けたりしなかったのか、転んで汚したりはしなかったのか。

耕作 しませんでした、いい服着てたんで汚さないように歩きましたから。

蓬菜 いい服着て山に入るな！

耕作 どんな服着てようと僕の勝手でしょ！

蓬菜 何だ！その口の利き方は！

耕作に掴みかかる蓬菜。

貞子 や、止めなよ！

貞子が割って入る。

このもみ合いの最中に、下手から鉄兄と勘平。

鉄兄 (小声で) お邪魔しやうす。

二人は下手の隅に座す。

貞子と葵の手によって、蓬菜と耕作が引き離される。

無然として座りなおす蓬菜。

貞子 ねえ、本当の事言いなよ耕作ちゃん、皆が噂してるように、あんた、神隠しにあったんだろ、キラに浚われたんだろ。

耕作 鬼になんかさらわれてませんよ。

君江 鬼じゃないよ！お吉良ちゃんは鬼なんかじゃないよ。

貞子 あ、ああそうだね……（耕作に）で、どうなんだい？

耕作 だから、何度も言ってるじゃないですか、僕は、一人で道に迷って、一人で山の中彷徨ってただけなんです。

ほんの少しの間。

蓬菜 （信三に）さっきからこの通りなんですよ、不審な所だらけなのに、見え透いた嘘を突き通すんです。

耕作 嘘なんかついてませんよ。

蓬菜 まだ言いやがる、折角、信三さんが来てくれたつてのに……。

信三 いえ……参考になりますよ。

信三は射るような視線で耕作を睨みつけている。

耕作は思わず顔を背ける。

一瞬の間。

勘平 すいません、ちょっといいですか？

人々がいつの間にかそこにいる鉄兄と勘平に好奇の目を向ける。

勘平 はばかりは何処ですか？

鉄兄 （小声で）おい。

勘平 だって、アレが来たんですもん。

蓬菜 はばかりは、この裏の突き当たりだが……。

勘平 じゃあちよっとお借りします。

鉄兄 ……。

怪訝そうな人々の間を抜け、勘平ははばかりへ。（舞台奥へ）

蓬菜 あの、あなた方は？

鉄兄 あ、ご挨拶が遅れ、失礼しました、私は不思議な話を採取しながら日本全国を回っている帝大の藤堂といいます、今はばかりを借りたのは、助手の沖山君です。

蓬菜 あ、学者先生ですか？

鉄兄 ええ、学者先生です、こちらで何か不可思議な出来事があったと聞いたものですから……。

蓬菜 ああ、それはどうも、けれど、折角来ていただいたのに、こいつ、何にも喋ってくれなくて……。

鉄兄 そうみたいですな。

人々が幾分非難めいた視線を耕作に投げつける。
一瞬の間。

信三がゆっくりと立ち上がる。

信三 さてと、じゃあ俺はそろそろ行くかな。

蓬菜 あ、もう？

信三 ここに居たって、こいつは何にも喋らねえだろう。

蓬菜 ……（一瞬忌々しそうに耕作を見つめ）あ、じゃあ、折角なんで酒の一杯でも飲んでいってください、おい、準備してくれ。

葵 は、はい。

葵、貞子は下手に退場していく。

信三は耕作を睨んでいる。

蓬菜 さあどうぞ、すぐ準備できますから。

信三 すまねえな、じゃあ一杯だけもらおうよ。

信三は耕作に近づき、

信三 おめえの体、獣の匂いがするな……熊でも猪でもねえ、今まで嗅いだ事のねえ獣の匂いだよ。

耕作 ……。

信三は下手に退場。

奥から首を捻りながら現れる勘平。

勘平 ……あれ、みんな居なくなっちゃった。

鉄兄 ったく、こいつは。

勘平 え？

蓬菜が顔を出し、

蓬菜 学者先生たちもよかったらどうぞ一緒に。

鉄兄 あ、すいません、突然押しかけたのに。

蓬菜 なあに大勢の方が楽しいですから。

蓬菜は退場。

勘平 何ですか？

鉄兄 酒飲ませてくれるんだとよ。

勘平 お、いいですね。

鉄兄は舌打ちしつつ、下手へ。

勘平が慌てて、後を追いつつ。

勘平 あ、やっぱり駄目でした、排便。

鉄兄 そんな報告はいらねえよ。

二人は退場。

後に残ったのは耕作と君江。

ほんの少しの間。

耕作は耐えかねて、

耕作 ……待ってたって、何もありませんよ、さっき喋ったことが全てですから。

君江 うん……分かってるよ。

耕作 ……

君江 私はね、あんたが何処で何してたかなんてどうでもいいんだよ……私は、もしもあんたがお吉良ちゃんの事を見かけたんだとしたら、その事を教えて欲しいだけなんだ、元氣そうだったか？とか今どんな暮らしをしてるのか？とか……ただそれだけなんだよ……もう二十年近く会っていないんだもん、私は。

耕作は一瞬思索するが、

耕作 ……僕はお吉良さんになんか会ってません。

君江 本当かい？

耕作 ……本当ですよ。

ほんの少しの間。

君江 分かったよ。

君江は立ち上がり寂しげに下手へ退場していく。

耕作 ……。

耕作は、立ち上がり大きくため息をつく。

耕作 はあく。

耕作は下手前方へ行き、何かを思い出すように中空を見上げる。

いつの間にか明かりは、サスだけになっている。

耕作は視線を戻す。（ここから回想なのだ。）

ドン！

殴られたような鈍い音。

一瞬の間。

耕作はゆっくりと崩れ、そのまま倒れこむ。

それを追いかけるように明かりが落ちていく。

暗転。

闇の中に歌声が聞こえてくる。

吉良の歌声だ。

【娘、大冒険の唄】

娘、十八 海が好きで
夜中に帆を揚げ 船を出す

船はボロ船 嵐で沈む
娘、飛び乗る 鯨の背中

鯨、潮吹きや 娘は飛ばされる
飛んで火に入る 鬼が島

鬼は腹ペコ 娘を探す
娘、逃げるや スタコラサツサ

すったもんだで お江戸に着いた
お江戸 花町 男に惚れる

惚れた男が 誰かに惚れて
憎たらしいので 男に火をつけた

唄の途中で、舞台に明かりが入る。
吉良は、上手側階段に腰掛け、お客に背を向け歌っている。（お客からはその顔は見えない。）
舞台下手前方には、倒れている耕作。
舞台の上では、吉良の唄に合わせて（？）ぬともけけ（妖怪です）が楽しげに踊っている。
不気味なんだか、切ないんだか、滑稽なんだかよく分からない微妙な空気が流れている。
気絶している耕作がピクリと動く。

ぬ 又！

ぬが踊りを止め、耕作の側へ。

ぬ 又又又。

もけけも気付き、

もけけ 起きた！

吉良 もう飽きたのか？まだ唄は続くぞ。

もけけ 飽きたじゃない、起きた。

吉良 起きたか！

振り返る吉良、その顔はもはや完全に鬼となっている。
吉良は階段を飛び降り、耕作の元へ走る。（鬼なので超早い）
三人は、耕作の顔を覗き込む。

耕作 うううう……。

耕作が目を覚ます。
物凄く近く近いところで不気味な奴らが覗き込んでいる。

耕作 ……。

一瞬の間。

耕作 う、うわ〜！

慌てて飛びのく耕作（多分階段の手前まで。）

耕作 な……な……何で……。

耕作は何と書いていいか分からない。

吉良たちはニヤニヤしながら、

吉良 十尺くらいかな、思ったほど飛ばんかったなあ。

ぬ 又又又又又？（もっと脅かした方がよかったかな？）

吉良 いくら脅かしてもあんなものだよ、さあ、わしの勝ちだ。

吉良は手を差し出す。

ぬともけけが渋々吉良の手に豆のようなものを乗せる。

吉良はほくそえみ、ポリポリとそれを食べ始める。

どうやら耕作が驚いて、どれだけ飛びのくか賭けていた様だ。

耕作 ……あ、あなたたちは？

吉良 お前、名前は？

耕作 ……。

吉良 お前が先に答える、そしたら名乗ってやる。

耕作 ……い、井ノ口……耕作。

吉良 耕作か。

耕作 あ、あなたたちは……。

吉良 わしらか？わしらは……教えない、ヒヒヒヒ。

ぬともけけ 又ケケケ又ケケケ（笑い）

腹を抱えて笑う三人を呆然と眺める。

吉良がそれに気付き、

吉良 わしが何者か知りたいか？

耕作は曖昧に頷く。

吉良 ……わしは、二十年ほど前この辺りでお吉良と呼ばれておったものだ。

耕作 ……お吉良……。

吉良 そうだ、誰かに聞いたことあるだろう、角の生えた女の話。

耕作は一瞬思案し、

耕作 ……あ。

吉良 人を恨む念が強すぎて、生きながら鬼畜に成り下がり、忽然と姿を消した女……それがわしだ。

耕作 ……。

吉良 驚いたか？

耕作は曖昧に頷く。
と、

ぬ ぬおおおおお〜！

もけけ もけけけけ〜！

ぬともけけが耕作に、飛び掛るようにして驚かす。
耕作は思わず目を瞑る。

耕作 うわっ！

もけけ ……驚いたか？

頷く耕作。
顔を見合わせ何故か誇らしげなぬともけけ。
耕作はリアクションを取れない。

耕作 ……。

吉良 お前、井ノ口って事は、重三ちゃん所か？

耕作 え？

吉良 井ノ口重三ちゃんだよ、鼻毛が必ず両方の孔から三本ずつ出た。

耕作 ……い、いえ、違います。

吉良 じゃあどこの井ノ口だ？

耕作 ……。

耕作は、鬼に個人情報語るのを躊躇する

吉良 うん？

吉良は、鬼は鬼なりの笑顔で答えを促す。

耕作 ……重三さんの隣の隣です。

吉良 ああ、あの大きな柿の木のある家な。

耕作 ……そ、そうです。

吉良 あれ、あそこに子ども居ったかな？お前幾つだ？

耕作 じゅ、十九です。

吉良 ああ、じゃあわしに角が生えた時に生まれた子だな。

耕作 ……。

吉良 あ、君ちゃんは？

耕作 ？

吉良 君江、大谷君江ちゃんじゃ、太鼓橋渡って四軒目の蔵のある家の隣の…。

耕作 ああ…：君江さん…：元気ですよ。

吉良 (嬉しそうに) そうか、もう結婚はしとるんじやろ。

耕作 はい。

吉良 そうか、君ちゃん結婚したのか…：相手はどんな男だ？優しいのか？

ぬ 又又又又(何オレの知らない話ばかりしてんだよ)。

吉良 何？話が内輪すぎてよく分からん？

ぬ 又々。(そうだ)

吉良 そうか、悪い悪い、つい懐かしくてな。

ぬ 又ン！(プン)

何故かぬは怒ったようにそっぽを向く。

吉良は耕作に近づく、

吉良 お前、色々教えてくれや。

耕作 え？

吉良 わし、あっちこっちの山渡り歩いてて、ようやく二十年ぶりに里帰りしてきたんじゃ、皆がどうなってるか聞きたいんじゃ、教えてくれ。

耕作 ……。

吉良 嫌って言ったら食うぞ。

耕作 ……。

吉良はじっと耕作の目を見つめる。

一瞬の間。

ピッ!

鳥の鳴き声が聞こえる。

もけけ かった！獲物かったぞ、吉良。

吉良は上空を旋回するトンビを眺める。

吉良 そうみたいじゃな……（再び耕作に）お前、今夜は美味しいもの食わせてやる、だから色々聞かせるよ……いいな。

吉良はニヤリと笑う。

耕作 ……。

吉良 ぬ！ちよっと見張っとけ。

ぬ 又！

吉良 いくぞ、もけけ。

もけけ もけけッ！。

吉良と**もけけ**は舞台奥へ退場。

耕作と**ぬ**が残される。

ぬは耕作を見張るような位置に座し、豆をボリボリ食い始める。

ほんの少しの間。

鳥が鳴いている。

耕作 ……（ふと思いつき）どうしてここに？……

ぬ 吉良と俺が連れてきたんだよ。

耕作 しゃ、喋った！

ぬ うるせえな、喋っちゃ悪いかよ！喋ろうと思えば喋れるんだよ。

耕作 ……。

ぬは立ち上がり、耕作に近づき。

ぬ おめえ、あんまり吉良と内輪の話で盛り上がるんじゃないぞ。

耕作 え？

ぬ いいな。

耕作 ????

ぬ ぬおおおおお！

大きく両手を上げ、耕作を驚かす**ぬ**。

思わずのけぞる耕作。

明かりが落ちていく。

暗転。

闇の中に貞子の声。

貞子 耕作ちゃん！……耕作ちゃん！

舞台に明かりが入る。
耕作が立っている。

貞子 あんたも一緒にどうだい、お酒。

耕作 いえ、僕はいいです。

耕作は舞台奥へと退場していく。

貞子 ……。

貞子はその後姿を見守り、退場。

一瞬の間。

下手から信三が現れ、舞台奥へ向かおうとする。
後を追うように鉄兄が現れ、

鉄兄 信三さん！

立ち止まる信三。

鉄兄 早速、山に入るんですか？

信三 ……いいや。

鉄兄 そうですか……てつきり鬼退治に行くのかと。

勘平が下手から現れ、立ち止まる。

信三 俺は桃太郎じゃねえよ。

信三は吐き捨て、奥へ向かおうとする。

鉄兄 ああ、信三さん。

信三 何か用なのか？

鉄兄 不躰なお願いで申し訳ないんですが、鬼退治行くとき私も同行させてもらえませんかね。

信三 俺は鬼退治なんか行かねえよ。

鉄兄 またまた、そのために呼ばれたんでしょ。

信三 そういう訳じゃねえよ、この村の若い奴が神隠しにあったからちょっと話聞いてくれてって言われただけだ。

鉄兄 そうですかね？ただそれだけのために、この辺で一番腕の立つ猟師を呼んだんですかね、聞きましたよ、信三さん、年に何頭も熊をし止めるそうじゃないですか？

信三 ……。

鉄兄 けど、どうかなあ？熊と鬼は随分と違いますよ、いくら信三さんが腕のいい猟師でもいきなり鬼が現れたら、驚くんじゃないですか？

信三 ……何が言いたいんだ？

鉄兄 私は結構妙な生き物見てますから、ビビる事はありませんよ、お供にすると結構役にたちますよ。

信三 何者だよ、お前……学者先生じゃねえのかよ。

鉄兄 勿論、学者先生ですよ、博学なんですよ、わた……。

突然、信三が猟銃の銃口を鉄兄の喉下に突きつける。

鉄兄 ！

勘平 鉄兄！

信三 学者先生ってのは変わってるな、助手から鉄兄って呼ばれるのか？

鉄兄 ……。

勘平 この野郎！

勘平が、殴りかかろうといきり立つ。

鉄兄 下がってる、勘平！

勘平 でも！

鉄兄 撃たれるような理由はなに一つねえんだ、撃ちやしねえよ……だから下がってる。

勘平 ……。

後ずさりする勘平。
と、

勘平 ……あ。

どうやら後ずさりしているうちに便意が来たようだ。

勘平は、ほんの少し、腰をよじりつつ、後ずさりしながらそのまま下手に退場してしまう。
舞台に残ったのはシリアスな芝居の二人。

信三 ……山の中歩いてるとな、たまに鉱山から鉱山を渡り歩く流れ者に出くわすことがある、そいつらは猫なで声と愛想笑いを振りまきながら近づいて来るんだ「ご苦労だね、マタギの旦那、調子はどうだい？」ってな……けどそいつらに気許しちゃだめだ、うっかり気許すと、身包み剥がされて山の中に放り出されるからな……オメエは、そいつらと同じ匂いがするよ……同じけだもの匂いがな……。

信三は銃口を向けたまま、ゆっくり体を離す。

信三 俺は、山に入るときは一人だ、お供なんていらねえよ、他を当たってくれや。

信三は隙を見せないように退場していく。
ほんの少しの間。

鉄兄 ……ち、熊撃ちふせいが。

勘平が首を捻りつつ戻ってくる。

勘平 あ、鉄兄、大丈夫でしたか？

鉄兄 ……おめえ……俺が銃口突きつけられてるのにウンコ行ったな？

勘平 ち、違いますよ、行ってませんよ！

鉄兄 嘘つけ！

鉄兄の迫力ある恫喝に勘平はつい、

勘平 ……だって、鉄兄、撃たれやしないって。

鉄兄 それは言葉のあやだ。

勘平 ……。

鉄兄 ったく、俺の命よりウンチを優先させやがって、オメエのウンチは俺の命より重いのか？

勘平 す、すいません、俺のウンチの方が軽いです。

鉄兄 おめえはもうウンコ禁止だ。

鉄兄は下手へ。

勘平 そんな、そんな殺生なこと言わないでくださいよ、出なかつたんですから！

鉄兄の後を追いながら勘平も退場。

一瞬の間。

楽しい音楽が流れてくる。

ゆっくりと、ゆっくりと明かりが変わっていく。

再び耕作の回想

吉良を先頭に、酒を持った**ぬ**、**もけけ**が踊りながら登場。

もけけの腰からは紐が伸びている。

その紐の先には縛られ、酒の入った椀を持った耕作。

吉良たちは、しばし微妙な踊りを続ける。

耕作はなす術もなく、ただ踊りを眺める。

やがて、三人はひとしきり踊り、

吉良 あゝ踊った、踊った。

ぬ 又又又（ふいーばーしたぜ）。

もけけは踊り足りないのか、まだ体を動かしている。

吉良 どうだった？わしらの舞は？一応、耕作を歓迎する舞のつもりだったんじやが。

耕作 はあ……。

耕作は返す言葉もない。

吉良はそんな耕作の反応を楽しむようにニヤリと笑い。

吉良 ふふん……ぬ！そろそろアレが煮えた頃じゃないか？

ぬ 又々！（分かった！）

ぬは舞台奥へ退場。

吉良 今から旨いもん食わせてやるからな、楽しみにしとれよ。

耕作 ……。

吉良は耕作の椀の中の酒が少しも減ってないことに気付く。

吉良 何だ、酒がちつとも減ってないじゃないか？下戸かお前は？

耕作 いえ……。

吉良 別に毒など入っておらんよ、それは猿踊（さるおどり）という名の正真正銘の酒じや。

耕作 猿踊？

吉良 そうじゃ……越後の方に酒造りのうまい七衛門と言う名の体の真っ白な年老いた猿がいてな、そいつが木の虚（うろ）の中に木の実や果実を放り込んで造るんじや、一口飲めば猿でさえ踊りだす……（もけけを指差し）あんな風にな。

もけけ わしは猿ではないぞ。

吉良 ははは、まあ、それくらい美味しい酒だと言う事じや。

耕作 ……。

しかし、と言うか、なお更に耕作は飲めない。

吉良 そんなに警戒するな、さつきも言ったように、わしがお前をここに連れてきたのは、ただ話を聞きたいからだ……こんな醜い姿になってしまっただけは、皆の前に姿を見せることも叶わんじやろ、だからせめてお前から話を聞いて懐かしい気持ちに浸りたいんじや、本当にそれだけじゃ……お前をどうにかする気なら、もうとっくにどうにかしてるわ、酒など振舞わずにな。

この台詞の間に踊りつかれたもけけが、踊りを中断し、酒を飲み始める。

もけけは吉良に酒を勧める。

もけけ ほら、吉良。

吉良 おう。

もけけの差し出した椀を受け取り、吉良は旨そうにそれを飲む。
耕作はそんな吉良と自分の椀を交互に眺める。

吉良 ……プハ、うめえ……ほらもけけ、お前ももう一杯いけ。

もけけは酒を飲み、

もけけ プハ、五臓もけけに沁みる沁みる、ささもう一杯いけ。

吉良 おう。

吉良と**もけけ**は楽しげに杯を重ねる。

耕作 ……あの……。

吉良 うん？

耕作 ……お吉良さんは……ずっと……何処に居たんですか？……その……村を出てから。

吉良 わしか？……わしはあちこちを転々としておったわ、山から山を渡り歩きながら……。

耕作 ……。

吉良 ……最初の三年は朝から晩まで泣き暮れる毎日じゃった、まあ無理もないわな、一度結婚に失敗したとは言え、まだまだ若い娘の額に角が生えてしまうたんじゃからな……何度死んでしまおうって思った事か……けれど、どうしても死ねんかった……心の何処かがそれでも生きたいと思っておったんじゃろうなあ……三年ほどたって、ようやく、涙も涸れてきた頃、わしは自分の体になんか得たいの知れない力が漲ってくるのを感じるようになった……鬼の力じゃ……。

耕作 ……鬼の力……。

吉良は頷き、

吉良 ……千里の先を見通し、風のように速く走り、千尋の谷を飛び越え、小山のような岩を軽々と持ち上げる、そんな鬼パワーじゃ。

耕作は思わず息を呑む。

吉良 おっと、大事な力を忘れておった、来年の事を言うと笑う力じゃ。

耕作 来年のこと？

吉良 アッハッハハハハ、止めてくれ、来年の事は言っちゃ駄目だよ、ヒッヒッヒヒヒ。

吉良は笑い転げる。

耕作 ……。

耕作はリアクション不能。
もけけがたしなめる。

もけけ 吉良！

吉良は笑いを止め、

吉良 悪い、悪い、今はギャグじゃ。

耕作 ……（ぼそりと）ギャグで……。

吉良 ともかくにもわたしはこうして鬼になった、それは傍から見れば哀れな事かも知れんし、自業自得なのかも知れん、けどな、わたしは自分ではちっとも哀れだとは思わん、むしろ鬼になってよかったと思っておる……だってそうじゃろ、自分の中に漲る力があって、自由で、憂いもなく……仲間もいる、これでわが身を嘆いていたらそれこそ罰当たりってもんじゃ。

耕作 仲間？……この、ひと？たちは一体……。

もけけは酒を飲み続けている。

吉良 こいつらが何者かはわしもよく知らん、いつの間にかわしの側にいるようになった、類は友を呼ぶって言うから、まあ、わしと同じ、もののけの類なんじゃろうなあ。

耕作 もののけ……。

耕作が酒を**もけけ**をおずおずと眺める。

もけけは怒ったように、

もけけ もののけと違うわ、もけけじゃ。

耕作 ……。

突然ぬの声が聞こえてくる。

ぬの声 又々。

舞台奥から大鍋を抱えた**ぬ**が登場。

鍋からは美味そうに湯気が出ている。

大鍋の縁から猪の顔が出ていとグット。

耕作 ！

ぬは大鍋を中央に据える。

吉良 お、美味そうに煮えたな、よし、わしがよそってやろう。

吉良が椀を取り、よそい始める。

吉良 （よそいながら）わしらは、いつもは肉は生でしか食わんからな、今日はお前のために特別に作ったたんじゃ、心を込めてな……ほれ。

耕作は、吉良の差し出した椀をおずおずと受け取る。

耕作 ……あ、すみません……。

吉良 うん。

吉良はにこりと笑う。

吉良はさらに椀をよそいながら、

吉良 別に変なのは入ってりやせん、猪の肉とキノコと野草じゃ……（ぬに）ほれ。

ぬ 又（俺は酒がいい）。

吉良 ああ、そうか、お前は生ものしま食わんからな。

ぬ 又。

吉良 じゃあ、もかけ。

吉良はもかけに差し出す。

もかけは美味そうに食い始める。

耕作は、鼻を椀に近づけてみる。

耕作 ……。

吉良 それ食って、色々話聞かせてくれや、さっきは何の憂いもないと言ったがな、時々人間だった頃の事を思い出して

な、そんなときはばかりは、さすがに胸が切なくなるんじゃ。

耕作 ……。

吉良 どれ、もう一踊りするか、ちと喋りすぎたわ。

音楽が流れ始める。

踊り始める吉良。

やがて酒を飲み干したぬも踊りに加わる。

もかけはひたすらに食っている。

耕作 ……。

耕作はしばし鬼たちの宴を眺め、徐に……食い始める。

ゆっくりと、ゆっくりと辺りの明かりが落ちていき、耕作のサス明かりに。

サス明かりの中で、耕作はひたすらに食い続ける、まるで永谷園のお茶漬けを食うみたいに。

やがて落ちていくサス明かり。

暗転。

舞台に明かりが入る。

誰も居ない舞台、勘平がウンコ禁止になってから十分後。

舞台奥から信三が現れる。

信三は遠くの山を眺める。

この山々のどこかに鬼が居るのか？等と考えていたりする。

信三 ……鬼退治か……。

信三はぼそりと呟き、下手に向かおうとする。

舞台奥から君江の声。

君江 あの、すいません。

信三 ？

君江が登場。

信三 何か？

君江 あの……。

信三 ？

君江は意を決し、

君江 ……お吉良ちゃんを撃つたりしないで欲しいんです、お吉良ちゃんは、決して鬼なんかじゃないんです、私たちと同じ人間なんです、可哀想な事情であんな風になってしまったけど、でもお吉良ちゃんに罪はないんです。

信三 ……。

君江 ……あの人は……ただ可哀想なだけなんです。

信三 別に俺は人は撃つたりしねえよ。

君江 本当ですか！

信三 ああ。

君江 ……。

君江は、信三の言葉に嘘がないかを探るようにじっと見つめる。
ほんの少しの間。

君江 ……有難うございます。

君江は頭を下げる。

君江 よかった。

信三 あんたらは変わってるよな。

君江 え？

信三 どうしてあの耕作って奴の神隠しを、吉良の所為にしたがるんだよ、あいつが鬼に隠されてたって証拠はねえんだろ？本当に山の中彷徨ってただけなのかもしれねえじゃねえか？

君江はほんの少し考え、

君江 ……確かにそうかも知れませんが……でも、耕作君が行方不明になってから一月ほどたった頃、お吉良ちゃんらしい人影を見た者が居るんです。

信三 ほう、目撃者が居るのか？

君江 はい……味噌なめが見たそうなんです。

信三 味噌なめ？

君江 あ、味噌なめと言うのはあだ名です、本当の名前は房恵ちゃんと言って、この辺りで一番裕福な家のお手伝いさんです、いくらご主人が注意しても夜中に味噌をなめる癖を止めないので、それで皆からは味噌なめと……。

信三 ……。

一瞬の間。

舞台下手にサス明かり。

下手から味噌壺を持った味噌なめが現れる。

味噌なめはメガネをかけている。

味噌なめ

……あれは……いつものように蔵の中に忍び込んで、夜中に味噌をなめていたときのことでした、ええ、いつもの味噌なめです……その日は、何か体調がよかつたんでいつもより多めになめていました……私はふと何か気配を感じ、振り向きました……するとそこに居たんです……米俵を担いだ……鬼が……。

味噌なめはゆっくりと舞台上手に目をやる。

味噌なめ
！

明かり取りの窓から差し込むような、仄かな月明かりが舞台上手の階段を照らしている。

その階段を米俵を担いだ吉良がゆっくり上って行こうとしている。

味噌なめは、恐怖で声を出せない。

階段途中で、吉良がゆっくりと振り返る。（この時目が光るとグッド。）

味噌なめ

ギヤアッ！

絶叫したまま固まる味噌なめ。

ゆっくりと下手サスと階段明かりが落ちていく。

再び舞台中央の二人。

一瞬の間。

信三

月明かりで見たんだろ？見間違いじゃねえのかよ。

君江

私もそう思いました、でももう一人目撃者が現れたんです、耕作君が行方不明になってから二カ月後、今度は昼間に。

信三

昼間に……。

君江

馬糞転がしが見たそうです。

信三

馬糞転がし？

君江

あ、馬糞転がしと言うのはあだ名です。

信三

そりゃそうだよ。

君江

本名は菊代ちゃん、この辺りで二番目に裕福な家のお手伝いさんです、ご主人がどんなに注意しても馬糞があると棒で転がしてしまうらしいんです、それで皆からは馬糞転がしと……。

信三

……。

下手にサス明かり。

棒を持った馬糞転がしが現れる。

馬糞転がしはメガネをかけている。

馬糞転がし　こんにちは、馬糞転がしです……あれは昼下がりの出来事でした、私はいつものように、誰かがうっかり踏んでしまわないよう馬糞を転がしてました、その日はなんとなく気分がよかったです、いつもより気合を入れて転がしてました……ふと私は、近くを誰かが走る足音を聞きました……最初、私はご近所の方が野菜を運んでるんだろうと思いました……けれど違ってました、だってその人の額には……。

馬糞転がしが上手に目をやる。

上手階段に明かりが入る。

野菜を沢山抱えた吉良がゆっくりと階段を上がっていく。

「誰だろう？」と怪訝そうに見つめる馬糞転がし。

吉良が立ち止まり、馬糞転がしのほうを振り返る。

一瞬の間。

馬糞転がし　ギヤアッ！

絶叫したまま固まる馬糞転がし。

ゆっくりと下手サスと階段明かりが落ちていく。

再び舞台中央の二人。

一瞬の間。

君江　味噌なめも馬糞転がしも嘘をつくような子じゃないんです。

信三　成る程、それであんたたちは、耕作の神隠しもそれに絡んでいると。

君江　この村にはお吉良ちゃんの話が残ってますから、やっぱりどうしても皆そう考えてしまうんです。

信三　そうか……。

君江　……私、お吉良ちゃんが帰ってきてるのなら……会いたいです。

信三　……。

君江　会って色々話したいんです、元気だったかとか、何をやってるのかとか……だってもう二十年も会ってないんです私たち……あんなに仲良くしていた……大事な……友達なのに。

ほんの少しの間。

信三　……安心しな、俺はただ神隠しの話聞きに来ただけだ、鬼退治に来たわけじゃねえし、ましてや人間を撃つことなんぞは決してねえよ。

君江　ありがとうございます。

君江は頭を下げる。

信三　しかし……。

君江　え？

信三　いや、山の中で耕作は何をしていたのかなと思ってな……お吉良と一緒に。

君江　……。

信三　ま、俺の知った事じゃねえな、じゃあな。

信三は下手に退場。

君江
……。

君江は立ち尽くし、思案する。
ゆっくりと明かりが耕作の回想へと変わり始める。
舞台奥から将棋板を抱えた**ぬ**が登場。
ほんの一瞬、現実と耕作の回想がオーバーラップする。
ぬの腰からは紐が伸び、そのまま舞台奥へと繋がっている。
ぬは君江の背後にどっかと座り、詰め将棋などを始める。

ぬ
ぬぬぬぬぬ（2二銀でこうなるか……）

君江は舞台奥へ退場。

ぬ
ぬ〜……ぬぬぬぬぬ……（あくこれじゃ、駄目か……ここに桂馬を打って、ああやって、こうなって……）

ぬの腰から伸びた紐が微かに揺れる。

ぬ
起きたか？

耕作が紐を手繰りながら**ぬ**の背後に登場。

ぬ
（詰め将棋をやりながら）よく寝てたな。

耕作
あ、どうも……。

耕作は辺りを見回す。

ぬ
みんなまだ寝てるよ、昨日はいつにも増して大騒ぎだったからな。

耕作
……そうか、随分と飲んだものな。

耕作はぼんやりと昨夜の事を思い出す。

ぬ
ぬぬぬぬ（3四銀だとうなって……）

耕作
あれ？**ぬ**さんは寝ないんですか？

ぬ
俺は寝ないのかだって？馬鹿なこと言いやがる。

耕作
？

ぬ
俺の名前は何だ！

ぬは突然起こったように立ち上がる。

耕作
え……？

ぬ
名前だよ！

耕作
ぬ……さんですよ、お吉良さんはそう呼んでたし。

ぬ　　さんはいらねえんだよ。

耕作　じゃあ……ぬ。

ぬ　　そうだ、ぬだ、ぬはねか？

耕作　はあ？

ぬ　　はじゃねえんだよ、ぬはねかと聞いてるんだ！

耕作　はあ……違います、ぬはねじゃないです。

ぬ　　そうだろ、ぬはぬであってねじゃない、だからおれはねじゃない……ね、じゃない、ね、ない……だから俺はねな
いんだ、分かったか！

何故か勝ち誇ったような顔のぬ。

耕作　……。

耕作は啞然とする。

ぬ　　ところでお前将棋指せるか？

耕作　え？……ええ、まあ……そんなに強くはないですけど。

ぬ　　強くないのなら相手にとって不足はねえ、来い、揉んでやる。

耕作　……。

ぬは将棋の駒を並べ始める。
ほんの少しの間。

耕作　……でもそろそろ帰らないと、皆が心配してるだろうし……。

ぬ　　お前はまだ帰れねえよ。

耕作　え？

ぬ　　だって、まだ話してねえだろ？吉良の友達のことか……食って、飲んで、踊って、騒いだけじゃねえか。

耕作　あ……。

ぬ　　吉良残念そうだったぞ、昨夜は何も聞けなかったって。

耕作　……。

ぬは、耕作と自分を繋ぐ紐を弄びながら、

ぬ　　もう一晩居な、時期に朝飯も出来るよ……（空を見上げ）あ、もう夕飯か？

耕作　……。

ぬ ほれ、ぼくっと突っ立ってないで、早く駒並べろよ。

耕作 あ、はい……（ぼそりと）まあいいか。

耕作はぬの前に座り、駒を並べ始める。

耕作 ……あれ？この駒、ぬになってますよ、確か歩の裏はとじゃなかったでしたっけ？

ぬ とは嫌いなんだよ！

耕作 ……。

首を捻る耕作を無視し、

ぬ じゃあ、俺からな。

耕作 どうぞ。

将棋を指し始める二人。

ゆるりと日が暮れていき、耕作の周りだけがぼんやりと明るくなっていく。

舞台奥からももけけが盆を持って登場。

盆の上には湯気の立つご飯と味噌汁をおかずが一品。

もけけ 耕作、飯できたぞ。

もけけは盆を差し出す。（盆は置かない）

耕作 あ……有難うございます。

耕作は、飯碗を取る。

ぬが将棋板を持ってゆっくりと立ち上がり、舞台奥へ。

もけけ いっぱい食え、おかわりもあるからな。

耕作 すいません。

耕作が飯を食おうとする。

吉良が酒瓶を持った舞台奥から現れる。

吉良 耕作、昨日は楽しかったな、（酒瓶を掲げ）今夜もやるか？

耕作 あ、でも皆の様子を話さないと。

吉良 おう、そうそう、それを聞かせてくれ、これを一杯やりながら……な。

耕作 あ……はい。

吉良は、碗を耕作に差し出す。

耕作は、飯碗をもけけの盆に戻し、吉良の差し出す碗を受け取る。

もけけはゆっくりと立ち上がり、舞台奥へ

吉良が酒を注ぎながら、

吉良 お前は若いのに、実にいい飲みっぷりだ、今夜も楽しくやろうな。

耕作 はい……。

耕作は酒を飲み干す。

吉良 おお、いい飲みっぷりじゃ、さあ、もっと飲め。

吉良は再び酒を注ぐ。

耕作は軽いめまいを覚える。

一瞬の間。

ぬが将棋板を持って登場。

ぬ 起きたか？耕作、飯が出来るまで一勝負じゃ。

耕作 あ……。

「もう朝か？」という顔で耕作がぼんやりと頷く。

吉良は耕作の腕を受け取り、ゆっくりと舞台奥へ。

もつけ 耕作、飯の用意できたぞ。

耕作は慌てて、もつけの方に目をやる。

ぬは耕作の前を通り、ゆっくりと舞台奥へ

吉良 耕作、今夜も楽しくやろうな。

耕作が吉良の方を振り返る。

もつけは耕作の前を通り、舞台奥へ。

ぬが登場し、吉良は消えていく。

ぬ 耕作。

もつけ 耕作。

吉良 耕作。

吉良、ぬ、もつけの三人が耕作を中心にして、円を描くように消えては現れ、現れては消えていく。

鬼と暮らす退廃の日々は回り灯籠。

耕作の周りで吉良、ぬ、もつけの作りだす時間が流れていく。

耕作は必死にその時間を追いかける。

音楽が流れている。

耕作

……僕の周りを鬼たちの時間が巡っていった、それはまるで回り灯籠のように、消えては浮かび、浮かんでは消えていく日々だった……僕の中からは、日にちの感覚も、家の事を思う気持ちも消えうせていき……そうしていつの頃からか、彼女を鬼と思う気持ちも消えうせていった……僕には、彼女の角が見えなくなっていった……だから。

吉良が耕作の目の前を通り過ぎようとしている。

耕作は、逃げていく幻を捕まえようとするように、吉良に抱きつく。

吉良は微笑む。

耕作は、吉良を抱きしめ、その胸に顔をうずめる。

耕作 ……お吉良さん……僕は……僕は……。

吉良は耕作の不器用な愛を優しく包み込む。

吉良 うん……何も言わんでもいい……何も言わんでもな……。

耕作 ……（呟くように）僕は……僕は……。

耕作はただ、ただ吉良をきつく抱きしめる。

吉良 うん。

吉良は優しく、若者の頭を撫でる。

音楽が高鳴っている。

吉良がゆっくりと、歓喜にうち震えるように、天を仰ぐ。

ゆっくりと明かりが落ちていく。

暗転。

ゆっくりと舞台に明かりが入る。

階段に吉良が座っている。

吉良はそっとお腹に手をやる。

吉良 ……。

ほんの少しの間。

舞台奥から耕作が現れる。

耕作の腰に紐はもうない。

耕作が吉良に気付く。

耕作は少し眩しそうに、照れ笑いを浮かべながら、

耕作 ……おはようございます。

吉良 おう。

耕作 ……今日は早いですね。

吉良 ああ。

耕作 あは、紐外してくれたんですね……。

吉良 ああ。

耕作 ……なんか急に外されると、変な感じですよ……ハハ。

吉良 ……。

耕作 ？

いつもと勝手の違う様子に耕作は怪訝そうな表情を浮かべる。

耕作 ……どうかしたんですか？

吉良は耕作の方を向き直り、

吉良 お前……もう家に帰れ。

耕作 え？

吉良 もけけが近くまで送ってく、もけけ！

もけけが登場。

吉良 耕作を近くまで送ってけ。

頷くもけけ。

耕作 ちょ、ちょっと待っててくださいよ、そんな突然帰れって言われても……僕、何か……。

吉良は首を振る。

耕作 ……え？どうしてですか？……だってまだ話してないじゃないですか、お吉良さんが知りたがっていた皆のこと。

吉良 もう聞かんでもいいんじゃない。

耕作 聞かんでもいいって……そんな……そのために僕は……。

吉良 ……わしの腹に子が入った。

耕作 え？

吉良 お前のおかげじゃ。

耕作 そ、そんな馬鹿な……だって、だって昨日のことじゃないですか！

吉良 わしには分るんじゃない。

吉良はゆっくりと腹をさする。

耕作 馬鹿な！そんな馬鹿な！

吉良 本当にお前のおかげじゃ……お前のおかげで、子が入ってくれたわ、礼を言うぞ、有難うな。

耕作 嘘だ……そんな……。

ふと耕作の頭にある考えがよぎる。

耕作 まさか……あなたは最初から、それが目当てで……。

吉良 ……。

吉良は何も言わずただ腹を撫でる。

耕作 ……僕を騙していたのか……なんて人だ……鬼！人でなし！

吉良 ……その通りじゃ。

耕作 ……ぼくはまんまと騙されたってわけか……あんまりだ……僕は嘘や偽りであなたを抱いたんじゃない……あなた

の事を本当に……。

吉良 黙れ〜！

耕作 ……。

吉良 聞いた風なこと抜かすな……お前はわしを親に見せられるのか？この女を好いてますと誰かに言えるのか？この、醜い角の生えたわしを！

耕作 ……。

なす術もなく見つめ合う二人。
ほんの少しの間。

吉良 ……もういい、行け……昨夜の事は気の迷いじゃ……わしの事は早く忘れろ……。

耕作 ……。

もけけはそれでもなお、そこに止まろうとする耕作を促し、そして二人は退場していく。

吉良 ……。

吉良は一度寂しそうに中空を見上げ、それから切なそうに腹をさす。
明かりが、母になろうとする鬼を優しく包み、そしてゆっくりと明かりが落ちていく。
暗転。

舞台下手にサス明かり。

サス明かりの中には蓬菜。

蓬菜

……さてさて、鬼が出るか蛇が出るか、大山鳴動したその年の鬼騒動は二つの目撃談と、謎に満ちた神隠し譚を残して鼠一匹出ないままに終わりを告げました。人々は日々の生活へと戻り、鬼の話は次第に薄れてまいりました、ただ一つだけ、下世話な噂話を残したまま……隠された真実は時にあらぬ噂を呼びます、黙して語らぬ耕作の身辺では、「おい、あいつ鬼と出来てたんじゃねえか？」「違えねえ、鬼と言っても女だろ、何にもねえほうが怪しいよ。」「もしかして、あいつ鬼専かよ。」などと芸能ゴシップ誌のようなあらぬ噂が飛び交うのは、昔も今も同じ事……そんな噂を振り払うように、その年の暮れ、耕作は妻を取りました……。

上手から辺りをはばかりる様に吉良が登場し、布の奥の家（そういう設定なのだ）を覗き込む。
吉良は赤子を抱いている。

蓬菜

……そして一年後、再び鬼騒動が幕を開けるのでございます。

舞台奥から耕作の声。

耕作の声 ……おいしい、早く飯にしてくれ。

新妻染が答える。

染の声

は〜い、もうじきに……。

吉良

……（ぼそりと）そうか……耕作は嫁を取ったか……。

吉良は寂しげに佇む。

染の声　ちょっと畑で大根を取ってまいります。

染が登場。

吉良は慌てて、家に背を向け去ろうとする。

染　？

染が上手に去っていく吉良に気付く。

視線を感じ、吉良は立ち止まる。

染　……あの……うちに何か？……。

吉良　……。

染が、その姿をよく見ようとする。

染　は！

染は驚き、足がすくむ。

吉良は慌てて角を隠すように、或いは赤子を隠すように袂を上げる。

一瞬の間。

走り去る吉良。

染　あれは……あの額にあったのは……大変だ……大変だ！

染は血相を変え、走り出し、下手へと退場。

蓬菜　……吉良が再び現れた、それも赤子を抱え……耕作の家の前に……その時の妻、染のショックは大変なものでした、彼女は髪を振り乱し、泥だらけの足で、村中を走り回り、そうしてわずか十数分で、帰ってきた吉良の噂が村を駆け巡ったのでございます。

舞台奥から貞子に肩を抱きかかえられた染が登場。

貞子　ほらしっかりして。

二人は上手側に。

続いて、奥から深刻な面持ちの葵が登場。

蓬菜　……ただ一人、耕作だけを不在にした村の会議が催されたのは……その翌々日のことでありました。

君江が登場。

蓬菜は中央に。

更に、味噌なめ、馬糞転がしが登場する。

蓬菜を中心に円を描くように彼らは座す。

皆の表情は一樣に硬い。

ほんの少しの間。

信三　……失礼します。

信三が奥から登場。

蓬萊 ああ信三さん、忙しいところお呼び立てして、すみません。

信三 いえ、一年ぶりですね。

蓬萊 ええ……さあどうぞこちらへ。

蓬萊は信三を横に座らせる。

信三 ……吉良が……又現れたとか。

蓬萊 そうなんです……そこにいる染が家の前で見たそうなんです……あ、染に会うのは始めてですよ。

信三 ええ。

染が頭を下げる。

当然信三も。

蓬萊 耕作の、嫁です。

信三 耕作の？……。

蓬萊 昨年の暮れに一緒になりました、例の神隠しから半年くらいたってからですか。

信三 ……。

信三は、震える染に目をやる。

染は震えている。

信三 ……それで……どうして吉良は耕作の家に？

蓬萊 それがですね……。

蓬萊は一瞬言い淀む。

と、

鉄兄 失礼します。

勘平 失礼します。

鉄兄と勘平が登場。

信三がスツと立ち上がる。

蓬萊 あ、学者先生、これは又どうして??

鉄兄 ああ、どうもお久しぶりです……いえね、去年ここを離れるときに頼んでおいたんですよ、もしも又鬼の話が持ち上がったらすぐに知らせてくれるようになって、その馬糞転がしちゃんに……ありがとう馬糞転がしちゃん。

勘平 ありがとう馬糞転がしちゃん。

馬糞転がし (照れて) そんな、呼び捨てでいいですよ、偉い先生なんですから。

蓬萊 ああ、そうだったんですか。

鉄兄 ええ、そうだったんです……（信三に気付き）あ……熊撃ち名人、これはどうもご無沙汰です。

信三 ……。

蓬萊 じゃあどうぞこちらへ、お前たち少し詰めてくれるか。

蓬萊は上手側、染の隣に座らせようとする。

鉄兄 いやいや、私どもは部外者ですから、末席で結構ですよ……（辺りを見回し）あ、あそこでいいです。

鉄兄と勘平はでかい態度で階段へ座り込む。

鉄兄 さあ、私らに構わずに、どうぞ進めてください。

信三 ……。

信三は立ったまま鉄兄たちを見つめている。

蓬萊 さあ、信三さんどうぞお座りください。

信三 俺はこのままでいいですよ、ちと足が痺れたもので。

睨みあったままの信三と鉄兄。

蓬萊 あ、そうですか??

信三 話を進めてください。

蓬萊 あ、はい……それで、吉良が耕作の家の前に現れた理由なんですが……その……確信はないんですよ、あくまで推測なんです……その……吉良は、うわなり討ちをやろうとしてるんじゃないかと。

信三 うわなり討ち?

蓬萊 ええ、どうもそう思い込んでいるみたいで、あ、勿論何の証拠も……。

染 証拠はあるじゃないか!うちの今の様子を伺ってた、それが何よりの証拠じゃないか!

貞子 染ちゃん。

感情的になった染を貞子が制する。

信三 どういうことですか?話がよく見えないんですが……何で耕作の嫁が、吉良にうわなり討ちされなければいけないんですか?

蓬萊 ……実は、誰が言い出したか分らないんですが、耕作が神隠しにあってる時に、吉良との間で何かがあったんじゃないかって、そんな噂が出回ってますね……。

勘平 （小声で）何かってなんすかね?

鉄兄 察しろよ。

信三 ……成る程、吉良にしてみれば、あんたがうわなりに当たるって事か。

蓬萊 はい……しかも吉良は赤子を抱いていたそうなんです……（染に）そうだな。

頷く染。

信三 ……耕作の子って訳か？

蓬萊 噂が本当なら。

信三 耕作は何て言ってるんだ？

染 聞けやしないよ、聞けるもんですか、そんな事……一緒になった当初、あの人はろくに私を見てなかった、いつもどっかで違うことを思っていたんだ……ようやくと、最近になってようやくと、私の事を見てくれるようになった……そんなあの人の気持ちを蒸し返すような事を聞けるもんですか……。

貞子 ……やっと夫婦らしくなってきたって言ってたもんね、あんた。

ほんの少しの間。

信三 ……それで俺にどうしろと？

一瞬の間。

染は信三に迫るように、

染 ……吉良を撃って欲しいんです。

信三 吉良を撃つ？

君江 ！

染 ……吉良がうわなり討ちに来るその前に、信三さんの手で、鬼を……やって欲しいんです。

信三 それは又物騒な話だな。

染 私、一瞬吉良と目が合ったんです……怖気たつような、憎悪の目でした、耕作を取った私を憎んでるんです、きっと吉良は私にうわなり討ちを……。

君江 い、いい加減におしよ！馬鹿馬鹿しい、黙って聞いてれば、なんだい……お吉良ちゃんがうわなり討ちに来るだつて？そんな馬鹿なことあるわけじゃないか！あの子の事は私が一番よく知ってるんだ、こくんな小さいときから本当の姉妹のように一緒に遊んでたこの私がね、あの子はうわなり討ちなんてそんな物騒な事考える子じゃないんだ、心の優しい……。

染 やったじゃないですか！二十一年前、お吉良さんは実際にうわなり討ちやったじゃないですか！

君江 あ、あれは、お吉良ちゃんがあまりにも可哀想だから、私たちがなんとかしてやろうって、それで……あんなことを……（葵に同意を求めるように）そうだろ？

葵 ……うん……確かに焚きつけたのは私たちだったよ、私たちだったけど……でもさ、今になって思うと、お吉良ちゃんにはやっぱりその素質って言うか、そういう血が流れてたんじゃないかとも思うんだよね。

君江 素質って何さ？

葵 鬼になる素質さ……だって私らは日本刀振り回せなんてこれっぽっちも言ってないもの。

味噌なめ え？日本刀振り回したんですか！

葵 そうさ、額から血流しながらね。

味噌なめ ……（何故かちょっと嬉しそうに、小声で）鬼に金棒だ。

君江 あれはお吉良ちゃんがあまりにも悔しかったからだよ、現に、あの時目にうっすらと涙ためてたじゃないか。

味噌なめ （さらに嬉しそうに、小声で）鬼の目に涙。

葵 だからって日本刀振り回してもいい理由にはならないだろ。

君江 興奮して何にも分らなくなってたんだよ、そういう事ってあるじゃないか、興奮しすぎて卒倒しちゃったのをみんなして運んだのを覚えてるだろ？

味噌なめ （嬉々として、小声で）鬼はそつと。

君江 煩い！鬼じゃないって言ってるだろ。

味噌なめは小さくなる。

貞子 ……君ちゃんさあ、あんたの気持ちはよく分かるよ、私だってあのお吉良ちゃんが、うわなり討ちやるなんて思えないよ、でもさ…お吉良ちゃんはもう居ないんだよ。

君江 ！

貞子 あそこにいるのは…あの山に棲んでるのは、お吉良ちゃんとは別の…吉良って言う鬼なんだよ。

君江 ……なんてこと言うんだよ…。

貞子 それにね、鬼を怖がってるのは染ちゃんだけじゃないんだよ…うちの亭主も。

君江 何で、貞ちゃんの亭主が、うわなり討ちを怖がらなきゃいけないんだよ？

貞子 うわなり討ちじゃないよ…あんまり言いたくはないんだけどさ…うちは、炭焼きやってるだろ、鬼が居るかもしれない山には…入れないんだよ、怖くて…炭焼きが山に入れなきゃ商売にならないじゃないか。

君江 ……。

馬糞転がし うちの旦那様も、もしもの事考えて職人たちにしばらく山入るの止めさせようって。

味噌なめ 私もキノコ取りにいけないんです。

葵 ……この村の者で山に入らずに生活できる者なんていやしないよ。

ほんの少しの間。

染 ……来るよ、吉良はきつと来るよ…。

君江 （苛立たしそうに）来ないよ！、お吉良ちゃんはそんな事は絶対にしないんだよ！

染 来たかどうか！

君江 来ないったら！

睨みあう染と君江。
一瞬の間。

勘平 あ、来た。

一同 え！

勘平 間違いなく来たな。

人々の表情に不安の色が浮かぶ。
勘平が腰を浮かしかける。
鉄兄が勘平の手をはっしと掴む。

勘平 ！

鉄兄 行くなよ！

勘平 ……。

鉄兄 すいません、なんでもありません、ただのキタナイ話です、来てないです、気にしないで。

勘平が鉄兄の横で、身をよじっている。

蓬菜 ……でも、その助手さんが……。

鉄兄 すいません、こいつ時々分けの分らないことを口走ったりするもので……そうだよな。

勘平 ええ……どうやら……来たけど……去っていくみたいです。

便意が遠ざかったらしい。
何故かホッとする人々。
勘平の掟破りのボケにもめげず、君江と染はシリアスに対峙している。

蓬菜 ……(君江と染に) お、おい、座りなさい、お前たち。

無然として座る君江と染。
蓬菜はため息を一つ付き、

蓬菜 (信三に) まあ、こんな次第なんです……どうしたら?……。

信三はしばし思案する。
信三の目に俯いたままの君江が目に入る。

信三 ……(頷きながら) 分ったよ。

染 え！じゃあ吉良を撃ちに！

信三 いや、あなたには気の毒だが、吉良を撃ちに行く理由がまだ見つからねえ。

染 だって現に吉良は、うちの前で……。

信三 現れただけだろう、本当にあんたを憎んでるのなら、ひと思いにやっちまえば済む事だ。

染 ……。

信三 そうやらなかったのには、何か別の理由があるのかも知れねえ、もちろんあんたの言うように様子を見に来て、これからうわなり討ちをやろうと思ってるのかも知れねえ……五分五分だ、それじゃあ吉良を撃ちにはいけねえよ。

染 そんな……じゃあ私はどうしたら？

信三 警察にでも言ってみたらどうだい？

染 もう話しましたよ、でも取り合ってくれないんです。

蓬莱 飛行機の飛ぶ時代に、鬼の話もないだろうって言われましてね。

信三 そうか……じゃあ万が一を考えて、俺はしばらくこの近くに留まるよ、それならいいだろ……誰かこの人の近くに住んでる人は居るかい？

蓬莱 私の家がすぐ隣です。

信三 ならちようどいい、しばらく泊めてくれるかい？

蓬莱 ええ、それはもう。

信三 (染に) 何かあったら大声出しな、すぐ飛んでいくから。

染 ……。

信三 じゃあ案内してくれ。

蓬莱 あ、はい。

染は打ちひしがれたままだ。

蓬莱と信三は奥へ向かう。

信三 あ、そうだ…… (染に) 気休めにしかならんだろうがな。

染 ?

信三 鬼つてのは……桃を嫌うそうだ、鬼門と裏鬼門にぶら下げとけば少しは効くかも知れねえぜ。

染 桃？

信三と蓬莱は奥へ退場。

染 も、桃よ！桃は何処！

馬糞転がし あ、うちの裏に今丁度、でも少し虫が……。

味噌なめ うちのも今食べごろです。

染 頂戴！なんでもいいから桃頂戴！

味噌なめと馬糞がし は、はい！

染 桃く！

桃を連呼しながら染、味噌なめ、馬糞がしは退場。
ほんの少しの間。

葵 ……じゃあ私たちもそろそろお開きにしようかね。

貞子 そうだね…君ちゃん。

君江 ……（座ったまま）私もじきに帰るよ。

貞子 ごめんよ。

葵も頭を下げる。

君江 ……。

貞子と葵は顔を見合わせ退場。
ほんの少しの間。

君江 ……。

君江は一つため息をつき、去っていく。

勘平 ……みんな帰っちゃいましたね。

鉄兄 ……。

勘平 どうします？

鉄兄 （ぼそりと）あの熊撃ち野郎、もったいぶりやがって。

勘平 え？

鉄兄 ……動かないのなら、ケツを押すまでだ。

鉄兄は立ち上がる。

鉄兄 お前はどっか行って紙と筆借りて来い、少し盛り上げてやる。

勘平 あ、はい。

不適な笑みを浮かべつつ、鉄兄は退場。
勘平も後を追う。

上手から赤子を抱いた吉良が現れ、階段へ。
吉良は赤子の額を指で撫でながら、呪文を唱える。

吉良 ……雪ン子、雪ン子、上さ乗ってとけろ、青くいおでこにすり込め、すり込め。

ぬともけけは寂しそうに俯く。

吉良 ん？何でお前らがそんな顔してるんだ？

ぬ 又、又又又又又又（いや、なんか胸の辺りが切なくなったような気がして）

吉良 胸が切なくなった？馬鹿なこと言うな、お前たちが切なくなるはずないだろう、人間じゃあるまいし。

もけけ あ、それもそうだな、人間じゃあるまいし。

吉良 それは大方、この辺りが酒を飲みたいと思ってる証拠じゃ。

ぬ 又〜！（酒か〜！）

もけけ 成る程、そんな気もしてきた！

ぬともけけは喜び勇んで舞台奥へ。

吉良 ……だがわしは、少しばかり切ないんじゃない？…まだ少くしばかり人間の心が残っているからな……。

吉良の手の中で赤子が笑う。

吉良は赤子の額を指で撫でながら、呪文を唱える。

吉良 ……雪ン子、雪ン子、上さ乗ってとけろ、青くいおでこにすり込め、すり込め。

一瞬の間。

舞台奥からぬが顔を出す。

ぬ 又又又又又〜！（吉良、酒の準備できたぞ〜！）

ぬのはるか上からもけけが顔を出す。

もけけは空中浮遊が出来る設定なのだ。（無論、脚立に乗っているだが。）

もけけ 赤子のオムツも乾いたぞ。

吉良 お〜、今行く。

吉良は赤子を抱いて舞台奥へ退場。

舞台奥から味噌なめ、下手から馬糞転がしが登場。

二人は首、腰に桃をぶら下げ、或いは頭の上に桃を載せている。

二人はいつの間にか、染私設護衛団、通称ピーチ・ポリス（セクシーではない。）になっただのだ。ピーチ・ポリスの二人は、元気に行進し、舞台中央で互いに敬礼し、向かい合う。

味噌なめ（ピーチ・ポリス一号） 裏鬼門方向特に異常なくし！

馬糞転がし（ピーチ・ポリス二号）ご苦労！鬼門方向、犬が一匹横切るも他には異常なし！

ピーチ・ポリス一号 その犬が変身した鬼だと言う可能性は？

ピーチ・ポリス二号 コロか？と聞いたらワンと答えたので、多分コロだと思われませう！

ピーチ・ポリス一号 成る程、それは多分コロであろう！

ピーチ・ポリス二号 引き続きしつかり見張るように。

ピーチ・ポリス一号 了解！

一号は下手へ、二号は舞台奥へと消えていく。

ピーチポリス二号と入れ違いに舞台奥から勘平が出てくる。

一拍おいて下手から鉄兄が登場。

鉄兄 置いてきたか？

勘平 はい、窓の隙間から差し込んできました。

鉄兄 よし、じゃあ後は待つだけだな。

勘平 あんなので効果あるんですか？

鉄兄 大有りだよ、幽霊が出るんじゃないかと怖がってる奴は、ばばあの腰巻でも腰を抜かすんだ。

勘平 ふ〜ん……あ、腰巻想像したら、ちょっとアレが来たみたいです。

鉄兄 ち、早く行って来い、じきに始まるぞ。

勘平 へい。

勘平は下手へ。

ニヤリと笑い、鉄兄も下手へ退場。

誰もいなくなった舞台。

ほんの少しの間。

染の叫び声がこだまする。

染の声 ギャア〜ッ！！！！

舞台奥から腰を抜かした染、その両脇を一号と二号が支えている。

染の手には一枚の紙切れ。

染 ……来るよ……鬼が来るよ……。

一号と二号に支えられ、空中を走りながら染はぶつぶつと呟いている。（出来ねえかな？）

三人は舞台下手へと退場していく。

一瞬の間。

舞台奥から貞子と葵。

二人は下手へ向かいながら、

貞子 届いたんだって？

葵 うん、染ちゃんちにさつき。

貞子 ……大変だ……みんなは？

葵 もう集まってるはずだよ。

貞子 行こう。

二人は下手へ。
一瞬の間。
舞台奥から君江が登場。

君江 ……。

君江は不安げな面持ちで下手へと走る。
一瞬の間。
舞台奥から、蓬菜、信三、両脇を一号、二号に抱えられた染、貞子、葵、君江。
やや遅れて鉄兄、勘平が登場。
人々の表情は一樣に強張っている。
一瞬の間。
蓬菜が紙切れを開き、

蓬菜 ……読むぞ。

幾人かが頷く。

蓬菜 ……書状……そちらには覚えがござろう、覚えなければと聞かせよう、そちらが婿にせし耕作は、元よりは、わが夫になるはずの身、この書状を書くその横でスヤスヤト寢息を立てている赤子がその確かな証し、人の夫を寝取りし罪は海よりも深く、その咎、命を持ってしか償えぬのが道理、よって、明晩、月の陰りたる時刻を待って、うわなり討ちに参上いたします。

人々 ……。

息を呑む人々。

蓬菜 尚、こちらの持参は、特にはなくても、鬼となりしわが身なれば、そなたの体を三枚におろし、タタキにして食するのはいと容易き事と覚えておられ……お吉良改め、嫉妬に狂いし鬼女……キラ。

人々 ……(ぞく)。

幾人かがとりはだのたった腕をさする。
一瞬の間。

染 ……嫌だよ、タタキになんかされたくないよ、食べられたくないよ！信三さん、助けてくださいよ！
染が必死の形相で信三にしがみつく。

信三 ……。

葵 えらいことになっちゃったね。

貞子 まさか本気でうわなり討ちやろうとしてるなんて……。

染 だから言ったじゃないですか！うわなり討ちやろうとしてるって！

貞子 ……。

馬糞転がし 怖いよ。

味噌なめ うん。

顔を見合わせ震える二人。

染 お願いします、信三さん、早く、早く吉良を撃ちに……。

染は信三に尚一層すがりつく。

君江がたまりかねたように蓬萊の持つ書状を奪い取る。

君江 それ見せてください！

蓬萊 あ……。

君江は書状を貪り読みながら、必死に記憶をたどる。

君江 ……こんな字だったかな……お吉良ちゃんの字……思い出せない……えっと……。

染 何言ってるんですか！君江さん！それは吉良からの書状じゃないですか！

君江 お吉良ちゃんがこんな書くわけないんだよ……こんな字だったかな……。

君江は必死に思い出そうとする。

鉄兄が君江の手から書状を奪い取る。

君江 な、何を！

鉄兄 これは貴重な学術文献になりますからね、そんなにクシャクシャにされたら困りますよ。

鉄兄が君江を睨む。

君江はその迫力に押され、言葉を失う。

君江 ……。

染 信三さん！

蓬萊 信三さん、私からもお願いします、この村で……人殺しなど起こって欲しくないんです。

染 信三さん！！

村人がすぎるような目で信三を見つめている。

君江は目をそらす。

ほんの少しの間。

信三 ……分ったよ。

染 ！

信三 ……鬼を撃ちに行くよ。

君江 ……。

染 ほ、本当ですか！有難うございます。

人々の顔に安堵の色が浮かぶ。

染 じゃ、じゃあ早速。

信三 ちょっと待ってくれ、こんな夜中にどこを狙って撃って言うんだ。

染 でも、時間が。

信三 渡辺綱が酒呑童子を討ちに行ったのも昼間だけ、まあ俺は渡辺綱じゃねえがな、夜は人間の方が不利だ、夜明けを待って出かけるよ、それでいいだろ。

染 あ……はい。

信三 それと……。

信三は村人を見返し、

信三 あ、あんた（貞子）がいい。

貞子 ？

信三 ちょっと……あ、あんたも（染）。

信三は顎をしゃくり、二人を舞台前方へ誘う。

貞子 ……なんでしょうか？

信三 俺が吉良を撃ちに山へ入ると、耕作の耳に入れて欲しい。

貞子 え？……あ、分りました。

貞子は怪訝に思いながらも、舞台奥へ退場していく。

染 信三さん、そんな事したら……。

信三 あんたには辛いだろうがな、こうしないと鬼は撃てねえんだ。

染 ……。

信三 ……いいか、もしも、耕作がどこかに出かけようとしても止めるなよ……いいな。

染 ……。

染は言葉もなく、ただ信三を見つめる。

信三 （蓬菜に）すまないが、毛布を一枚貸してくれ。

蓬菜 毛布？

信三 今夜は野宿になりそうなんでね。

蓬菜 はあ？？？

信三 行こうか。

蓬萊 あ、はい。

二人は舞台奥へ向かいかける。
信三は足を止め、君江の方を見る。

信三 ……すまねえな。

君江 ……。

君江は無言で唇を噛む。
信三は一つ息を吐き、蓬萊について退場。
他の人々も互いに顔を見合わせ、退場していく。

鉄兄 (小声で) やはり耕作に道案内させる積りか？

鉄兄は耕作に近づき、

鉄兄 おい、絶対に熊討ちから目離すなよ。

勘平 は、はあ……。

鉄兄 はばかり行ったらただじゃおかねえからな、行きたくならねえようにケツに石ころでも積みとけ。

鉄兄は舞台奥へ。

勘平 分りやした！

勘平も舞台奥へ。

君江が一人残される。

君江 ……お吉良ちゃん……。

君江は唇をキュッと結び、舞台奥へ去っていく。

楽しい音楽が流れてくる。
舞台下手前からぬを先頭に、酒瓶を抱えたもけけ、赤子を抱いた吉良の三人が踊りながら現れる。
三人は今宵もいい感じで酔っている。
舞台中央で吉良が立ち止まる。
吉良の腕の中で、赤子が妙な顔をしている。

吉良 ……おっ。

ぬ 又？(どうした?)

吉良 悪い、おしめを換える頃合みたいじゃ。

ぬ 又々(そうか)。

吉良 すぐ戻る。

二人はひよっとこのように唇を突き出す。
ぬともけけ、生まれて始めてのキッス！
と、
吉良が顔を出す。

ぬともけけ ！！！！！！

慌てて離れる二人。

吉良 何してんだ？お前たち。

一瞬の間。

ぬともけけ ……♪ヌヌヌヌヌヌ……♪ヌヌヌヌヌヌ……

ぬともけけはバツの悪さをごまかすように、大声で鼻歌を歌いながら、激しく踊りながら上手前へ退場していく。

吉良 ？

吉良は頭を捻りつつ、子どもに目をやる。
いつの間にか子どもはスヤスヤと寝息を立てている。

吉良 ふふ……さっきまで笑ってたのに、こいつめ、急に寝てしまったな。

音楽が流れ始める。
吉良は揺りかごを揺らすように、子どもを起こさないように小さく踊りながら上手前へと退場していく。
平和な夜が深まっていく。

ゆっくりと明かりが変わっていく。

夜明けが近づいてくる。

ほんの少しの間。

耕作が、辺りをはばかりるように舞台奥から出てくる。

耕作は上手奥へ向かいかける。

染 こんな夜も明けぬうちからお出かけですか？

耕作 ！

染が舞台奥から現れる。

耕作 あ……ああ、ちょっと早く目が覚めてしまっただけ、折角だから、散歩でもしようかと……。

染 そうですか……。

染はじっと耕作を見つめる。

ほんの少しの間。

耕作 ……じゃあ行ってくるよ。

染 ……。

耕作は踵を返し、上手奥へ向かおうとする。

染 耕作さん。

立ち止まる耕作。

染 ……私は、あなたの妻です……あなたに関わる悪い噂も、いい噂も、すべて呑み込んで、あなたに嫁ぎました。

耕作 ……。

染 どうか、そのことを忘れないでくださいね。

耕作 ……。

染 朝ごはんの支度をして、お帰りを待っています。

ほんの少しの間。

耕作 行ってくる。

染 お気をつけて。

耕作は去っていく。

染は佇む。

舞台下手から信三が現れる。

信三は、染の横を通り過ぎる。

染 これでよかったですか？

信三 ああ、後は旦那の帰りを信じて待ってるんだ。

染 ……。

信三は耕作の後を追って、上手奥へ。

染は舞台奥へと消えていく。

鉄兄と勘平が、信三を追って、下手前から上手奥へと進んでいく。

君江が更にその後を追って、下手前から上手奥へと進んでいく。

舞台奥から、少しへばりながら耕作が現れる。

耕作 ……はあ、はあ……お吉良さん……どこだよ、どこに居るんだよ……お吉良さん……。

耕作は舞台中央で辺りを探し、やがて下手前へと向かう。

去っていく耕作とシンクロしながら、舞台上手階段に吉良が現れる。

微かに聞こえる赤ん坊の泣き声。

吉良 よしよし、どうした……今朝は珍しくグズってるな……そんなに泣かんでもいいじゃないか、お乳か？お乳欲しいのか？

吉良がお乳を飲まそうとする。

子どもは暴れ、尚一層泣き声をあげる。(そんなイメージです)
これから起こる出来事に抵抗するかのよう。

耕作の後を追って信三が現れる。
信三は確かな足取りで、下手前へ。

吉良 ほらほら……どうした、何でそんなに泣くんのだ？

少し荒い息を吐きながら信三の後を追う鉄兄と勘平。

君江が、疲れた足を引きずるように、その後を追って舞台奥から登場。

君江 ……お吉良ちゃん……。

君江は少しばかりよろめきながらも必死に信三達の後を追う。

吉良 どうしたんだろうなあ？……ああ、おしめか？よしよし、今換えてやるからな、ちょっと待ってろよ。

吉良は子どもを岩の上に寝かせる。(客席から死角となる階段下、奥まった場所)

吉良は乾いたおしめを取りに行く。(階段を上っていく事になります)

耕作が舞台奥から登場。

耕作 ……(吉良の台詞に被るように)どこだ？……どこに居るんだよ……お吉良さん……。

耕作は舞台中央で、辺りに目を走らせる。

やがて耕作は、自分のいる場所から、谷を挟んだ向こう側、切り立った山の頂に、おしめを取りに行く
吉良の姿を見つける。

耕作 ……お吉良さん……。

耕作は叫ぶ。

耕作 お吉良さ〜ん！

吉良は気付かない。

耕作 くそ、気付かないのか？

耕作は、更に大きな声で吉良を呼ぶ。

耕作 ……お吉良さ〜ん。

吉良 ！

吉良が振り返る。

一瞬の間。

吉良 ……耕作……。

耕作 ……届いた……お吉良さ〜ん！早く逃げてくださ〜い！

吉良 (嬉しそうに)耕作〜！……お〜い！

耕作 早く、そこから逃げてくださーい！

吉良 何い〜？何と言ってるんだ〜！

耕作 命が狙われてるんです！信三さんがあなたを撃ちに来てるんです〜！

吉良 何〜？……（ボソリと）何言ってるんだか……ちょっと待ってろ！子どもが泣いててよう聞こえんのだ〜！

吉良は岩肌を少し下り、泣いている赤子に声をかける。
耕作の側からは、吉良が何をしているのか分らない。

舞台奥から信三が現れる。

吉良 頼むからちょっとだけ静かにしててくれな、今耕作と……。

しかし子どもは泣き止まない。

耕作 何をやってるんだよ？お吉良さ〜ん、逃げてくださーい！お吉良さ〜ん！

吉良 ああ、そうか……お前、お父が来たのが分ったのか、よしよし、今会わせてやるからな……（再び階段を駆け上り）待ってる〜！今子ども連れてそっち……。

耕作の背後で信三が銃を構える。

吉良 ……うん？

吉良の目が銃を構えた信三の姿を捉える。

吉良 ……何だ……お前、何でわしに銃を向けてるんだ？……

舞台奥から鉄兄と勘平が現れる。
二人は黙して成り行きを見つめる。

吉良 ……何で銃なんか向けるんだ〜！

耕作 え？

背後の気配を感じ、振り返る耕作。

耕作 ！

君江が走りこんでくる。

君江 撃たないで〜！

バ〜ン！！！！！！
銃声が山にこだまする。
銃弾が吉良の体を貫く。

吉良 ！

時間が一瞬止まる。

音楽も、赤子の鳴き声も消え、静寂だけがスッと辺りを包み込む。
吉良は……吉良は、ゆっくりと大きな弧を描いて、谷底へと（階段下）落ちていく。
一瞬の間。

耕作 お吉良さん！

君江 お吉良ちゃん！

銃を下ろし、信三が立ち上がる。
耕作が信三に飛び掛り、首根っこを掴む。

耕作 何故だ？何故撃った？！

信三 ……俺が撃たなきゃ、お前の嫁がうわなり討ちをされるんだ。

耕作 ！

信三は耕作を見つめる。
耕作は、手を離し、ふらふらと歩き、谷底に目をやり、崩れ落ちる。

耕作 ……お吉良さん……うううううううううう。

耕作が苦悶の声を上げる。
君江が放心したように座り込む。
人々は吉良の散った谷底に目をやる。
ゆっくりと、ゆっくりと明かりが落ちていく。
暗転。

舞台に明かりが入る。
それからおよそ一時間後、五人は吉良のいた場所に居る。
階段から下を、つまり谷底を見下ろしている。（脇を見下ろす形になります。）
ほんの少しの間。

信三 ……（辺りの景色に目をやり）この辺りだったな……吉良が落ちたのは……。

耕作 ……。

耕作はじっと谷底を見つめたままだ。

君江 ……お吉良ちゃん……。

君江が谷底に向かってそっと手を合わせる。
勘平が谷底を覗き込み、それから鉄兄の方を見る。

信三 ……さあ、耕作。

信三が耕作の肩に手をかける。
耕作はその手を緩く払いのける。

耕作 ほっといてください。

信三 ……。

ほんの少しの間。
勘平が再び、鉄兄の顔を見る。

鉄兄　なんで俺の顔を見る？

勘平　いや、俺に下まで行って見て来いと言うんじゃないかと思って。

鉄兄　言わねえよ……確かめるまでもねえだろ、ここから落ちたんだ、いくら鬼でも助からねえよ……。

信三　さあ耕作。

再び信三が耕作を促す。

耕作　ほっといてくださいって言ってるじゃないですか。

信三　ほっといてやりてえがな、お前が家に帰るのを見届けるまでは俺も帰れねえんだ。

耕作　？

耕作が怪訝そうに信三を見る。

信三は腰を下ろし、

信三　……気持ちも分るがな……お前には、家で待ってる人が居るんじゃないのか？

耕作　……。

ほんの少しの間。

信三　……帰ってやりな……嫁の所へ……。

耕作　……僕は……僕は……。

信三　いいんだよ、おめえは何一つ悪くねえんだ。

耕作　……。

ほんの少しの間。

信三　さあ。

耕作は信三に肩を押され、とぼとぼと山を下り、妻の元へ。
見送る人々。

耕作は下手前から退場していく。

信三　さあ、帰るか。

信三も山を降りようとする。

と、赤子の笑い声が聞こえる。

四人　！

人々は辺りを見回す。

君江 あ！

君江が、少し離れた岩の上にトンボを見ながら笑い声を立てる子どもを見つける。（そんなイメージ）
君江は赤子の下へ走り寄る。（階段を下りる）
一瞬の間。

君江が赤子を抱いて、現れる。（再び階段を上る。）

君江 ……この子は……お吉良ちゃんと耕作君の……。

信三 そうみたいだな。

君江 私、耕作君呼んできます！

君江が山を下りようとする。
鉄兄が君江の手を掴む。

君江 ？

鉄兄 そんな事して大丈夫なのか？

君江 え？

鉄兄 あいつは結婚してまだ半年しか経ってねえんだろ？前の女のガキ連れて帰って、家に入れてもらえるのか？

君江 ……でも。

信三 確かにその通りだ、そんな事したら皆不幸になっちまう、耕作も、嫁も……そのガキもな。

君江 じゃあこの子は……どうしたら？

君江は吉良の遺子を見つめる。
鬼っ子は、無垢な目で君江を見つめ返す。

君江 ……。

信三 ……村長（むらおさ）に言って、里親探すよう手配してもらうんだな、耕作に見つからねえように。

鉄兄 なんなら、私が里親になりましょうか？

信三 おめえが？……。

信三がその真意を探るように鉄兄を睨む。

勘平 え？鉄兄に子どもなんて育てられるんですか？

君江 （何事か喋ろうとする鉄兄を遮るように）私が！

三人 ？

君江 私が……育てます。

信三 おい、本気か？

君江 はい……幸い、うちには子どもが居ません、だから……いいえ、この子は私の大事な友達の……お吉良ちゃんの遺した子です、だから私が……育てたいんです。

信三 信三は君江を見つめる。

信三 まああんたがいいのなら、それが一番いいのかも知れねえな。

君江 はい。

君江は信三に深々と頭を下げ、山を下りようとする。

信三 おい、赤子を抱いたままだとそっちは険しすぎる、俺についてきな。

君江 すいません。

信三に先導され、二人は下手前に退場していく。

信三は下手前で、一瞬立ち止まり鉄兄たちの方を振り返る。

鉄兄は何かを考えている。

信三 ……。

不審に思いつつ、信三は君江の後を追って退場。

鉄兄 ……おい、あの君江って女の家調べとけ。

鉄兄は山を下りはじめる。

勘平 え？

勘平が慌てて後を追う。

鉄兄は下手で立ち止まる。

ゆっくりと二人のサス明かりに変わっていく。

勘平 ?

鉄兄 ……今夜、あのガキを浚いに行くぞ。

勘平 え？何ですか？

鉄兄 あのガキには、鬼の血が流れてるんだ。

勘平 鬼の血？

鉄兄 そうだ、鬼の血だ……あいつの額にあった青い痣がその何よりの証。

勘平 でも痣はあっても、角なんかありませんでしたよ。

鉄兄 角はこれから生やすんだよ。

勘平 ?

舞台奥に赤ん坊を抱いた君江のシルエットが浮かび上がる。

君江は赤ん坊をあやしている。

鉄兄 あの赤ん坊に……憎しみを教える……裏切りを覚えさせろ……嫉妬を、暴力を、残虐さを、この世のありとあらゆる悪を、奴の額に叩き込め！

勘平 ……。

鉄兄 そうすりゃ角なんて簡単に生えてくるさ……簡単に。

サス明かりの中で歪んだ笑みを浮かべる鉄兄。

舞台上手、**ぬともけけ**が吉良を谷底から引き上げ始める。(階段上へと引きずり上げていく。)

ぬ 又(吉良)。

ぬともけけは必死に吉良を介抱する。
だが吉良はピクリとも動かない。

邪悪な心と、無垢な心と、境をさ迷う命、三つの明かりの中で、三つの魂が揺らめく。
やがてゆっくりと明かりが落ちていく。
暗転。

正面奥、布の向こうがぼんやりと明るくなる。
それはどこか平和な家の明かりを思わせる。

ここは君江の家。

舞台下手に鉄兄と勘平が現れる。

二人は家の様子を伺っている。

ほんの少しの間。

勘平が一瞬顔を歪める。

勘平 ……あ。

鉄兄 あって言うな。

勘平 はい。

鉄兄 ……おい。

鉄兄と勘平は身を隠す。

君江の家から貞子と君江が現れる。

君江 悪かったね、突然頼んだりして。

貞子 いいんだよ、私のお乳でよかったら、又いつでも呼んでおくれ、牛並みに出るから。

君江 ありがとう。

貞子 ……でも、本当に大丈夫かい？旦那はなんにも言っていないのかい？

君江 夫にはとりあえず親戚の子を預かることになったって言ったから、うちの人も子ども欲しがってたし、今のところは喜んでるから平気みたい。

貞子 そう……でもちょっと切なくなっただね。

君江 え？

貞子 目元がお吉良ちゃんに似てんだもん……。

君江 うん……よく似てる。

貞子 ……この間はあるなと言ってごめんよ。

君江 気にしてないよ。

見つめ合う二人。

ほんの少しの間。

貞子 じゃあ私帰るから。

君江は頷く。

貞子 しっかり育てておくれよ……お吉良ちゃんの子だからね。

君江 分ってる。

貞子は微笑みかけ、下手奥へ去っていく。

君江は家に戻る。

下手前から鉄兄と勘平が再び現れる。

鉄兄 ……。

君江の家の明かりが小さくなる。

ほんの少しの間。

鉄兄 よし、行くぞ。

鉄兄と勘平は君江の家へ入っていく。

ほんの少しの間。

ドン！（生音です、これで君江の亭主がやられたのだ。）

激しい物音、鉄兄、勘平、赤子を抱いた君江の姿がシルエットで浮かぶ。

浮かばなくてもOKです。うごめく影として映れば可です。）

（このシルエットははっきり

君江の声 何をするんですか？

赤ん坊を奪おうとする勘平から必死に守ろうとする君江。

鉄兄が君江の後頭部を殴る。

ドン！

崩れる君江。

赤ん坊を抱き抱える鉄兄。

一瞬の間。

鉄兄の声 ……行こうか。

勘平 はい。

正面布のシルエットが消える。

一瞬の間。

舞台上手奥から少し息を切らしながら赤ん坊を抱いた鉄兄が登場。
月明かりに照らされた道。

鉄兄は、舞台中央やや下手よりで立ち止まる。

勘平が上手奥から背後を振り返りつつ、鉄兄を追いかけてくる。

勘平 ……うまくいきましたね。

鉄兄 ああ。

鉄兄は月明かりで赤子の顔をまじまじと見る。

赤子は眠っている。

鉄兄 ……月明かりで、こいつの額、今にも角が生えてきそうだよ。

鉄兄は邪悪な笑みを浮かべ、

鉄兄 行くぞ。

二人は下手に向かいかける。
と、

信三の声 おい。

二人 !

立ち止まる鉄兄と勘平。

舞台奥から銃を構えた信三が現れる。

信三 ……その赤ん坊、どこに連れて行く気だ？

鉄兄 ……。

信三 ……研究のためとかぬかすなよ……大方どっかの見世物小屋にでも叩き売るつもりなんだろう？

鉄兄 ……人間きの悪い事を。

信三 子どもを下ろせ、そしてこの村から出ていけ。

鉄兄 ……。

ほんの少しの間。

信三が詰め寄る。(二人の距離は一メートル程)

信三 さあ、その子どもを下ろせ。

鉄兄 ……あんたは、猟師のくせに、平気で人に銃口を突きつけるんだなあ。

信三 ああ、俺はけだものには躊躇しねえんだ。

鉄兄 そうか……ならこっちも遠慮しねえですむ……。

信三 ?

鉄兄 ちよっとガキ持って、離れてろ。

鉄兄は赤子を勘平に預ける。
そして、鉄兄は徐に懐からナイフを出す。

信三 !

……猟師ってのは頭悪いな、猟銃ってのはそんなに近づいて使うもんじゃねえだろ、俺は自信あるぜ、お前が動いてる俺に照準を合わせる前に、懐に飛び込んで、このナイフを突きつける自信がな。

信三 ……。

鉄兄 ……さあ、撃ってみろよ。

信三 ……。

信三は動けない。
ほんの少しの間。

鉄兄 ……どうした？……早く撃って来いよ……さあ！

信三 ……。

鉄兄 さあ！

と、
舞台上手奥に、よろめきながら君江が登場。

君江 ……返してください……。

三人 !

君江 ……その子を返してください……。

信三 下がってろ！

信三の制止を聞かず、君江は二人の近くへ。(舞台中央奥、布の前辺り)

君江 お願いですから返してください……お吉良ちゃんの子を……返してください。

君江は座り込み、鉄兄に懇願する。

鉄兄 ……出来ねえな、お前のところに置いてたら、このガキは駄目になっちゃう。

君江 え？……

鉄兄 このガキはな、鬼っ子なんだよ……どぶの水啜って、腐ったモン食って、うす汚い根性身につけて……そうして醜い鬼に変わっていくんだ……見てえだろ？檻の中に入ったそんな本物の鬼を、話の種に見てみてえだろ？

君江 ……そんな事しないで……その子は、お吉良ちゃんの子は……鬼じゃないから。

鉄兄 鬼なんだよ、醜い角を生やす鬼の子なんだよ！

一瞬の間。
吉良の声が響く。

吉良の声 ……返せ！

四人 ！

人々は辺りの気配を伺う。
一瞬の間。
舞台上手奥に太い枝を杖代わりにしてよろめきながら吉良が現れる。

四人 ……。

吉良 その子を…わしの子を返せ…。

鉄兄 ……生きてたのか…。

吉良はゆっくりと顔を上げる。
その顔は、まさに鬼の顔となっている。（恐ろしいまでに鬼となったメイクで）
人々は息を呑む。

勘平 お……本物の、鬼だ…。

勘平が腰を抜き、へたり込む。

吉良 返せ……わしの子を返せ…。

吉良がゆっくりと手を差し出す。
勘平は震えながら、後に逃げようとする。

鉄兄 ……渡すなよ、そのガキを渡すなよ…。

鉄兄が勘平の方を見る。
一瞬の間。
信三が猟銃で鉄兄のナイフを叩き落す。

鉄兄 く！

信三が落ちたナイフを蹴飛ばし、（階段にニアピンでお願い。）銃口を向ける。

鉄兄 ！

鉄兄は動けない。
一瞬の間。

吉良 ……返せ、子を返せ…。

吉良が覚束ない足取りで勘平の方に迫ろうとする。

勘平 あわわわわわ。

勘平は子を持つ手を緩める。

君江が勘平の元へ走り、子を奪う。
君江は子どもを吉良の元に。
一瞬の間。

君江 ……お吉良ちゃん……。

君江は子どもを吉良に差し出す。
吉良は震えながら、大事そうに子どもをうけとる。

吉良 ……。

吉良は愛しそうに赤子を見つめる。
吉良の目に涙が光る。
ほんの少しの間。
吉良はゆっくりと信三たちに憎悪の目を向ける。

吉良 ……わし……お前たち、殺してやる。

吉良が一步前に出る。
信三が銃を吉良に向ける。
吉良がその銃口を見つめる。
ほんの少しの間。

吉良 ……何故だ？何故なんだ？……何故お前たち、わしの子を浚う？……何故……わしを撃つ？……わし……お前たちに何かしたのか……。

人々 ……。

吉良 ……お前ら本当に殺してやりたい……お前らの喉笛咬み切って……腹引き裂いて……お前らの、心の臓、この手で握りつぶしてやりたい……。

身を強張らせる信三と鉄兄。

吉良 ……本当に……本当にそうしてやりたい……でも……でもそんな事したら……そんな事したら……わしのここ（額）……又、角が生えてしまう……醜い、醜い角が生えてしまう……そんな事になったら、この子……わしの事怖がってしまう、わしの事醜いと思ってしまう……だから……だからお前らの事許してやる……憎うて……憎うて……本当に殺してやりたいけど……許してやる……だから……もう行け……。

突然、吉良は力尽きたかのように崩れる。

君江 お吉良ちゃん！

君江が駆け寄る。

鉄兄 ……い、今だ……撃て！鬼を撃て！

鉄兄が叫ぶ。

鉄兄 どうした撃てく！鬼はそこだ！

突然信三は猟銃を鉄兄に向ける。

鉄兄 ！

信三 あそこに鬼は居ねえ……俺には……おめえが鬼に見えるぜ、醜い角を生やした鬼にな！

鉄兄 ……。

君江に抱き抱えられ、吉良は正気を取り戻す。

吉良 ああ、君ちゃん……。

君江 お吉良ちゃん……。

吉良は必死に立ち上がろうとする。
君江がそれを助ける。

吉良 ……ありがとう、君ちゃん。

君江 うん。

二十年振りの邂逅。
二人は見つめ合う。
ほんの少しの間。

君江 ねえ、今夜うちに来なよ、お医者さん呼んで、その傷診てもらってさ、治るまでいていいから、そして治ったら、又一杯話しようよ、昔みたいに。

吉良は一瞬嬉しそうに微笑む。

君江 ね、そうしよう。

一瞬の間。

吉良は俯き、そして君江の手を振り解き、上手に向かって歩き始める。

君江 ……お吉良ちゃん……。

吉良は堅く口をすぼめる。
何かを喋ったら、思い出が溢れ出してしまうのだ。

吉良 ……。

吉良は思い出をこぼさないように、君江の優しさを子どもにも届けるように、そっと歩を進めていく。

君江 ……。

吉良は階段を上り始める。
たまらず君江が後を追う。(階段の下で。)

君江 お吉良ちゃん！

吉良 ……。

吉良は無言のまま、ゆっくりと、ゆっくりと階段を上っていく。

君江 ……ねえ、又帰っておいでよ……五年先でも、十年先でも、二十年先でもいいからさ、又帰っておいでよ。

吉良 ……。

君江 帰ってきて、今度は……今度は一杯お話しよう……昔みたいにお喋りしようよ。

吉良は無言で階段を上る。

君江 私ね……私、その子にも又会いたいんだよね、だってほんの短い時間だったけど……自分の子どもと過ごすみたいと一緒に居たんだもん……私ね、楽しみな、その子がどんな子に育つのか、どんないい子になるのか、とても楽しみなんだもん……だから、ずっと待ってるから……ここで待ってるから……その子を見せに……きつと帰ってきてね……。

吉良 ……。

吉良は立ち止まる。

その首が、ほんの微かに頷いたように動く。

そして吉良は又、階段を上り始める。

君江 ……約束だよ……ね、約束だからね……。

ゆっくりとゆっくりと明かりが落ちていく。

暗転。

それから数ヶ月後、山々には冬の気配が漂い始めている。
バーン！！！！

暗闇の中に、銃声が鳴り響き、続いて、鳥たちの飛び去る音。

ゆっくりと明かりが入る。

舞台上手、階段上で銃を撃ったばかりの信三。

信三 ……。

信三は、銃弾が確かに獲物を捉えたか、確認するように遠くに目をやる。

ニメートルはあろうかと言う巨大な猪が、ゆっくりと崩れ落ちる。(そんなイメージなのです)

信三は階段を下り、下手に向かおうとする。
と、

蓬萊の声 信三さくん……おい！信三さくん！

舞台上手、階段横から蓬萊が息を切らしながら登場。

蓬萊 ……ハア、ハア、やっと追いついた……うちの村のモンが、信三さんがこの山に入るのを見たって言ってたもんで、慌てて追いかけてきたけど、いやあ、なかなか追いつくもんじゃないですね……ハア、ハア。

信三 何か用だったんですか？

蓬萊 いや、用って言うか、この間のお礼の言葉も言わずじまいだったもんで、あの後信三さん所行ったら、もう居なかったもんで。

信三 別に礼はいらないですよ。

蓬萊 いやいや、君江から色々話を聞きました……本当に有難うございました。

信三 いや、本当に礼はいいですよ、大した事したわけじゃない……あ、皆は元気ですか？

蓬菜 ええ、おかげ様で。

信三 そうですか、それはよかった……耕作も元気で……。

蓬菜 はい、染と二人で、よく畑に出ています。

信三 ……（笑みを浮かべ）よかった、それだけがちょっと気がかりだったもので。

蓬菜 ……本当に何から何まで。

蓬菜は再び頭を下げる。

信三 ……。

蓬菜 あ、信三さん、よかったら今夜はうちで晩飯食いませんか？何のお礼もしないままって言うのは、どうにも気持ち悪くて、お願いですから、是非。

信三 いいですよ……丁度、一人じゃ食いきれない程の猪が獲れたところだし。

蓬菜 ああ、よかった、じゃあ早速皆に用意させますんで。

蓬菜は上手奥へと走る。
と、

蓬菜 ……あ、雪だ……。

雪が舞い始める。

蓬菜 信三さん、雪降ってきましたよ……。

信三 そうみたいですな。

二人は上空を見上げる。
ほんの少しの間。

蓬菜 吉良は……。

信三 ？

蓬菜 ……吉良は又ここに戻って来るんですかね？

信三 ……ここに鬼が居なければね。

蓬菜 え？

信三 いや……俺には分かりません。

蓬菜 ……あは、じゃあすぐ準備に取り掛かりますんで、いつでも下りて来て下さい。

蓬菜は退場。

ほんの少しの間。

信三

……子が出来て、初めての冬だな……風邪引かさんようにな。

信三は下手に向かって歩き始める。

音楽が流れ始める。

しんしんと雪が降り積もっていく。

遠くから聞こえてくる吉良の声。(スピーカーを通すか?)

吉良の声

……雪ン子、雪ン子、上さ乗ってとけろ、青くいおでこにすり込め、すり込め……雪ン子、雪ン子、上さ乗ってとけろ、青くいおでこにすり込め、すり込め……雪ン子、雪ン子、上さ乗ってとけろ、青くいおでこにすり込め、すり込め……雪ン子、雪ン子、上さ乗ってとけろ、青くいおでこにすり込め、すり込め……

吉良の祈りは山々にこだまし、やがてゆっくりと降りつむ雪の中にとけていく。

静かに明かりが落ちていく。
暗転。

終わり。